
STAGE OF

さくたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STAGE OF

【Nコード】

N9488M

【作者名】

さくたん

【あらすじ】

これは美少女…ゲフン！
元対人恐怖症の男の子風巻奈於とその周辺をとりまく人々の
学園シリアスコメディーだと思う。

プロフィール

6月現在で考えられています。

・風巻奈於 しまきなお

age 14

birth 10月23日

158cm 41kg

A型

<好き・得意> 水泳・果物・スイーツ

<苦手> 生きてるもの全般

本編主人公。水泳部所属。生まれた時は医者が女子と間違えかけて女子の名前に。

結局男として戸籍は取れた（それについてはまたエピソードが）間違いなく美少女だが、れっきとした男子…どっちでもいいけど。

両親が火事によって他界、姉が留学しているので、現在1人暮らし。

水泳はめっちゃ速いが、ほかのスポーツに関しては微妙。

意外と甘いもの・お笑い大好き。けっこうバカ。

中1のときプールで彼女が自殺し、それにより対人恐怖症に。

しかし幼馴染や家族の協力により、なんとか立ち直る。

・樹雨 澪 きさめみお

age 15

birth 6月6日

159cm 43kg

B型

<好き・得意> チーズケーキ・風巻くん

<苦手> クモ

光鳴湾中学校前期生徒会長。メインヒロイン。中2でここにやってきた。

元陸上部だったが、水泳部へ転部してきた。

茶髪のポニテで、澄んだ瞳。浴衣の似合う美少女：だけれども数々の武勇伝をもち、噂もたくさん飛び交っている。

成績も1番で、スポーツなんでもできるので、近寄りがたい。

しかし本当は、単純かつ純粋な性格で、

突飛な行動ばかり起こすから勘違いされているだけ。

子供みたいにはしゃいだりすれば、お姉さんのように優しくなったり。

ちなみに両親がいないので、故郷の祖母からいろいろもらいながら一人で生活している。

みずのあきひろ
・水野晃弘

age 15

birth 4月21日

165cm 58kg

O型

<好き・得意> スポーツ・写真

<苦手> 学問全般

風巻の幼馴染。水泳部所属。たぶん半袖短パン似合うんじゃないのかな？

運動神経の高さは並ではない。ただし正真正銘のバカである。

父と母、兄とで暮らしている。

乗り物酔いが激しいので、いつもポケットに酔い止めを忍ばせている。

写真撮影が趣味。特に女子の。

彼の撮った写真は学校の男子に人気だとか。

うのほしや
・海野原慎也

age 14

birth 7月5日

171cm 58kg

A型

<好き・得意> ライトノベル

<苦手> 漢字に“瓜”を使う食べ物

テニス部所属。風巻の幼馴染。

成績は2・3番くらい。顔立ちはとてもいい。

父、母、姉、弟の5人家族。

まじめに見えてものすごいお調子者なので誰とでも友達になれる。

転校してきたばかりの澪とともに話せたほど。

考えが昭和臭いが、それを本人に言ったら拷問されるとか。

さかもとしやう
・坂本翔

age 14

birth 8月16日

163cm 49kg

O型

<好き・得意> アニメ・数学・パソコン

<苦手> 上記以外全部

パソコン部の部長。アニメやグラフィック、CGを作れるなど、

中坊とは思えないほどの技術がある。

数学は神様。以外壊滅。運動音痴でもある。

いろいろできるので、自分は天才と思っているナルシスト。

実際バカなのに。

あわゆきさやか

・沫雪莢香

age 13

birth 1月29日

142cm 31kg

AB型

<好き・得意> 機械全般・料理

<苦手> 運動・スポーツもろもろ

主要人物唯一の中学2年生。パソコン部所属。

ふわつとした髪で、かわいらしい声をしている。

技術・家庭科に関しては先生をも上回る実力だとか。

機械はなんでも直すことができる。

また、料理も上手で菓子作りは天下一品。

運動神経については皆無。残念。

かわもとまなか

・河本真夏

age 14

birth 7月2日

153cm 40kg

A型

<好き・得意> 小説・水泳

<苦手> 刃・サスペンス系

元水泳部、中1の冬のとき、一家全員（真夏以外）が殺される事件がおこり、

真夏自身重症を負った。現在パソコン部。

セミロングの避暑地のお嬢様タイプ。実際貧乏。

成績は上の中くらいで運動もそこそこ。

男子からは人気があり、ファンクラブたるものも存在するらしい。

おそらく彼氏がいなのはクラブが関係していると思われる。

からさわもみじ
・ 桜沢 桜

a g e 1 5

b i r t h 4月18日

1 5 6 c m 3 6 k g

O 型

< 好き・得意 > 生物・甘いものみんな愛してる

< 苦手 > レモン

テニス部所属。ボーイッシュな「ボク少女」で女子に非常にモテる。

1年のとき奈於と同じクラスになり、奈於が引きこもった際に面倒を見てくれた1人で、奈於からすごい感謝されている。

友達思いな性格と持ち前の明るさからか、友達の数は

学校の壁を越すといわれている。

ちなみに頭は慎也と争うほどのよさ。慎也とは昔からのライバル。

現在彼氏募集中。

しまぎあかね
・ 風巻 茜

a g e 2 2

b i r t h 10月23日

1 7 1 c m 4 7 k g

B 型

< 好き・得意 > 音楽・弟

< 苦手 > 暗記もの

奈於の姉、奈於の女子顔が納得できるほどの美女。

ただしロリコン・ショタコン・ブラコン（brotherコンプレックス）の

人間적におかしい人。ゆえに奈於を心の底から愛している。

奈於を振り向かせるならどんな卑猥なことだってする。困った人だ。

けれど姉らしく、奈於の面倒はしっかりと見て、アドバイスなんかも与える。

なので奈於は姉さんのことは信じきっている。

奈於が中一になりたて4月にウィーンへ留学。白い服を着た子供たちと

いつしよに歌っていた。音楽学校出身、歌声は神。
奈於に勉強を教えられる程度の学力はもっている。

1 - S t S T A G E O F S W I M (前書き)

とにかく理由があつて改稿版を出しました。
きつと前よりおもしろいはず…！

1 - S t S T A G E O F S W I M

正直、今どうしていいか分からない。

文化祭で漫才しただけで、今の状況には普通はならない。

誰か、誰かこの状況を上手く脱却できる方法を教えてくれ。

僕は今、告白されました。

「「はい、どーも!」!」」

この光鳴湾中学校は、6月の文化祭の真っ最中だ。

企画に一環で舞台で漫才をしているのは…

「風巻奈於と、」

「りぐる…あつ水野晃弘です。」

「そのネタは一般人には通用しない！」

「いやー、今日はほんとにたくさんのＩＡＥＡの方たちが…」

「いや違うよ！国際原子力機関！？来てんの！？」

「あれ？ＪＡＸＡも…」

「来てない！宇宙規模ですかこれは。」

「みなさん宇宙食を食べながら楽しんでくださいね。」

「普通に楽しんでいってくださいね。」

「いやでもさあ…。」

「ん？」

「この時期だもんでさあ、青春したいじゃん？」

「まあ僕ら地味だもんな。」

「告白とか青春感じるよね。」

「どついう観点か知らないけれど…まあね。」

「だからちょっとシュミレーションしてみない？」

「いいけど・・・設定は？」

「尚人は告ろうとしている人、俺はそれを見守る友人ってことで。」

「ああ・・・あの子が近くに・・・。」

「この際告れば？」

「でも恥ずかしいし・・・。」

「勇気出せって!」

「じゃあちょっと練習。」

「うん。」

「あ・・・あの・・・。」

「うん？」

「メ・・・メアド交換しない？」

「あゝ。違うね。」

「何が？」

「告白だから気持ち伝えないと。」

「なるほど。承知した。」

「あ…これ僕の気持ちです！」

「ん？なに？」

「水炊き。」

「どうしろと…！」

「あ、焼肉定食の方が…」

「それもない！ていうか物渡すならラブレターとか…。」

「あー。最近流行ってる三行ラブレターとか。」

「それもいいね。」

「晃弘なにかない？三行。」

「…いきなり振るの？まああるけど。」

「どんなの？聞かせて。」

君は会ったびに、いつも手を振ってた
鈍感なふりして手を振ってたけれど
ほんとは照れくさくてうれしかった

「…うわあ。」

「なにその反応！」

「妄想は悪いことじゃないから。」

「ああ、お前嫌われるわ！不幸の手紙に埋もれてしまえ！」

「ひどい！その言い草はないよ晃弘！」

「ていうか誰が好きなの？」

「うん、実は生徒会長なんだ。」

「さらばだ風巻、安らかに眠れ。」

「え！なんで死ぬ前提なの！？」

「樹雨滲だろ？あいつに告白したやつは振られた後半殺しにされるとの噂だ。」

ほんとにろくでもない噂だ。

さて、ここはふざけてアドリブでも入れてみよう！

「それでも僕は、あいつが好きだ。まさに憧れの存在だから…。」

充分に告白だよねこれ。

「よし。特別にいい精神科医を紹介してやる。」

やばい。本気だと思ってる。

「ま、まあ冗談はこれくらいにして。」

「冗談かよ！笑えないからなこれ！」

危なかった…けど今思った。後始末がこわい。

今のところなんとか筋は通ってるけど、実際はもうアドリブの嵐だ。

でもここで起死回生のボケをすれば……つけるはず！

「ほんととは…」

「ん？なんだ？」

「ウサギに恋してしまったんだ。」

観客席からやかんを投げられた。

「おつかれ！おもしろかったよ。」

「おお慎也！なんか納得いかんがありがとう。」

話しかけてきたのは海野原慎也だ。

頭いいし顔もいいので、その顔面をつぶしてやりたいとつくづく思う。

「でもあの会長にケンカ売るとは…。」

「ネタだから心配無用…」

「君が風巻くん…?」

うん、死亡フラグだね。

樹雨澪にはいろいろな武勇伝があるらしい。成績も運動も容姿も並外れて良いのに、

S気質なので周りから恐れられているとか。

見てごらん。初対面なのにこのざまだよ。

「私のことすきって…」

「いやっ、こ…これは…」

「…感動しました。」

…はっ?

「あの告白感動しました! 私…あなたのことが好きです!」

「
「
「
・
・
・
え
っ
! ?
「
「
「

1 - S t S T A G E O F S W I M (後書き)

文も長くなっていきます。そのぶん話数は減るだろうと…

1 - 1 水泳部諸君（前書き）

「で結局付き合っことになっ たんだ。」

「断っ たら何されるか分かんないもん。」

1 - 1 水泳部諸君

昨日の出来事がまだ鮮明に残っている。夢じゃなかったのか…。

あの後会長は、僕の“仮”の彼女となった。（むりやりそうさせた…）

これじゃ練習も充実しないよ…。

僕、風巻奈は水泳部に所属している。水野晃弘も水泳部だ。

ちなみに女子と合同で、総員8名と少なめ。

いま僕らは、6月の総合水泳大会に向けて、総合1位をとるために必死で泳いでいる。

僕は二十五メートルクロールを十三秒五で泳ぐ、学校最速記録保持者だ。

晃弘は五十メートルの平泳ぎで三十九秒八だ。十分に速い。

大会は十三日…いま八日なんであと5日ですね。

「やっぱり練習はきついな。」

「將軍のメニューは疲れるんだよ……。」

“將軍”という名は水泳部の顧問の先生のあだ名だ。

かなりメニューが厳しいことで有名だが、有名な選手を育て上げたのも事実だ。

「それより会長との成り行きどうしよう。」

「じゃああれだ。振っちゃえよ。」

「いや……やめとく。後々めんどくさいことになりそう。」

「それもそうだな。」

噂からすれば、半殺しにされそうだもん。

「でも会長部活やってたっけ？」

「陸上部だぞ。知らないのか？百メートルを十二秒で走れること。」

「興味なかったし、僕がまた登校し始めたのは二年の三学期からだっただから。」

「そう……だったな。」

僕はいわゆる？対人恐怖症？だ。中学1年生のときに、僕の目の前で、

彼女が飛び降り自殺をしたのを境に、完全にまいってしまったのだ。
いや…前々から情緒不安定だったんだけど。

けれど幼馴染の晃弘と慎也、家族や友達、さまざまな人たちの協力の甲斐があつて

今はなんとか楽しく過ごしている。

みんなに恩返しをするために、僕は全国大会を目指している。

「まあ、会長さんががんばっていい関係を築いてこい。花束は用意しておく。」

「それが葬式で使われることがないことを必死で祈るよ。」

「ははは、まあがんばれ。」

「まったく…ほんとにどうしよう。」

次の日の部活。

「諸君、今日から新たなライバルが増えるぞ。」

いちいちみんなを諸君と呼ぶのはやめてほしい、とつくづく思う。

「風巻、文句があるなら随時受け付けてやるぞ。」

恐ろしいね。

「そんなことより、新入部員を紹介する。」

すると更衣室から出てきたのは茶色の髪にポニーテールをまとめた
シニヨンで、

スレンダーで容姿端麗な美少女…ってまさか！！

「ご紹介しよう。わが校の生徒会長樹雨澪だ。」

「わけあって陸上部から転部してきました。短い間だけどよろしく
ね。」

そう言うとき茶髪は僕にウィンクをしてきた。

これで転部してきた理由が分かった気がする。

「よかったな風巻。いい彼女がいて、俺はうらやましいぞ。」

「まだそんな関係じゃ…ってまって將軍！なんでそんなこと言うの
！？」

なんだろう、みんなが僕を冷やかしの目で見てる気がする。

それにしてもなんで將軍がそんなこと知っているんだ？

「…きれい。」

晃弘が目を見開いてるのは分かる気がする。だってきれいだもん。

やっぱり彼女にするにはもったいない…

つといかんいかん！そんな目で見たら死の危険がやってくるかもしれない！

「」「」……………「」「」
……………

もちろん男子部員から。

1 - 1 水泳部諸君（後書き）

ほんととほの髪型はツインテール片方だけ（左耳）というものなんですよ。

あれなんていうんだろう？

1 - 2 脅威のタイム測定（前書き）

いくつか変更しました（8月7日）

風巻尚人 風巻奈於

御神渡慎也 海野原慎也

淡雪莢香 沫雪莢香

1 - 2 脅威のタイム測定

「えー、ではタイム測定を始めよう。」

会長の自己紹介が終わった後、將軍はそう告げた。

実は一週間前に大会選手選択審議会（つまりタイムが速い選手選ばるか！）

があつたのだが、会長が転部してきたので再選出することになったらしい。

協会への選手表の提出は今日が締め切りらしいので、変えても問題はない。

「それでは水野。種目は50メートル平泳ぎ男子の部で間違つてないか？」

「はい。もちろん。」

「それでは位置に着け。」

水泳のタイムではスタートが肝心だ。飛込みではできるだけ長い距離を飛ば

タイムは稼げる。でも飛びすぎるとそれが裏目にでてフォームが崩れてしまう。

ちなみに飛べる人は六メートルも飛んでいる。

「オーケーですよー。」

「それでは…よい」　　ビー！

ブザーが鳴り、晃弘は水面に飛び込んだ。

ちなみに平泳ぎは胸の前で一かき、足で一蹴りという動作を繰り返す泳ぎ方で

「ブレスト」とも呼ばれていたりしている。

推進力が四泳法中最も無くて、馬力がけっこう必要な泳ぎ方だ。

晃弘は僕とは違って馬力がかなりあるので、クロールよりこっちの方が向いている。

さあ、そうこうしてるうちに晃弘は折り返したようだ。

ちなみに平泳ぎは4泳法最古の泳法で、1837年にイギリスで行われた

世界で最初の水泳（競泳）大会から1896年の第1回オリンピックの頃まで

平泳ぎが主流とされ、自由形として競われていたんだ。その後、1900年に

クロール泳法が生み出されたことで、1904年の第三回オリンピックから

平泳ぎは独立種目となったんだ。

今は自由形といえばクロールで泳ぐことなんだけど。

オリンピックで日本人が最も多数の金メダルを獲得している競技でもあるんだ。

「水野32秒47。」

「あ、晃弘もう終わったんだ。」

32秒47は中学生ではかなり速い部類に入ると思う。

「おつかれ、タイム上がったじゃん。」

「俺が泳いでいる間に豆知識とは、貴様いい度胸してるじゃないか。」

さて、どうしたものか。

さてとうとう僕の出番だ。前は調子よくなかったから挽回したい。

「風巻。種目は50メートル自由形女子の部で間違っていないよな？」

きさまの延髄を破壊してやりたい。

「將軍、僕は男です！」

「失礼、男子の部だな。」

そろそろいいかげんに男として認識してほしい。

「將軍、準備できました。」

「よろしい。それでは…」

静寂の間がこのプールを支配する。緊張を破る音が鳴り響いた。

「よい！」「ビー！！」

クロールを泳ぐ際、速く泳ぐには様々なポイントがある。

まず手は人差し指から水にはいると抵抗が少ない。

手を真つ直ぐに入れてしまうと、水の抵抗を受けてしまい、遅くなってしまう。

水の中に入った腕は、思いっきり肩から伸ばすようにして前に出す。

胸のあたりをかいているときに顔を横に上げ、息継ぎをする。

キックはももを動かして蹴る。ももをしつかりと動かして、膝、足首へと折れずに

柔らかく曲がるように連動させることが大事だ。足首は力を入れずにブラブラの状態にして、

膝は力を真っ直ぐに伸ばす。

僕はこれら基本的部分を相当練習した。そのおかげで全体的に抵抗が少なくなり、

推進力もかなりついた。あとはリズムだ。ピッチも徐々に上げていき、ブレない様にするだけ。

クイックターンも上手きめ、残りはあと少しだ。ここからが正念場。

ここから少しペースが劣ってしまうのが弱点だったので、持久力を上げるために

毎朝長い距離を走っている。こういう練習でも水泳のタイムは上がると思っただ。

ラストスパート、水が僕をゴールに到達させまいとでもいうようにとても重く

のしかかってくる。けれどそれに逆らい、勝利の舞台に到達した。

「風巻、25秒61。」

『『なんだと!?!』』

みんな見たかい?これが努力の賜物なんだよ?

『す…すげえ。全国レベルだ。』

『また学校最速…いや、これは県最速レベルかも。』

『神だ!神がいるぞ!』

『かつこいい…さすが僕の未来のお嫁さん…。』

なんかおかしな声が聞こえた気がする。

「さすが風巻、新入部員に目にものを見せたな。」

「ははっ、そうですね。」

「くう…わたしだって負けないんだから!」

いくら会長といえどもこのタイムに勝てるわけが無い。

勝てたら日本中学記録更新できるし…

「樹雨。種目は何にするか？」

「50メートル自由形で。」

「それでは位置につけ。」

陸上部では100メートル12秒って今思うと怪物だと思う。でも水中だと

どうなるんだろう？

「お手並み拝見だな、風巻の彼女の。」

「その言葉、すごくひつかかるんだけど。」

あれでも会長はモテてるって噂らしいからなあ…。

「オッケーです！」

「それでは…よい！」

その瞬間、信じられないようなものを目の当たりにした。

ビー！！

『…………えっ！？』

ブザーが鳴り終わるとき、すでに10メートルの地点にいる！

「え！？会長10メートルも飛び込んだ！？」

推進力もかなり速くて…なんだろう、もう解説のしようがない。

それから僕は全員会長の実力に終始啞然としていた。

「き…樹雨、25秒68。」

将軍ですら、こんなバケモノ見たことないと思う。すごい驚いているし。

「うう…！悔しい！もう少しで風巻くんに勝てたのに！」

今気にするところはそこじゃないと思う。

「あのね会長さん。僕に勝ったら中学校女子記録更新なんだよ?」

『……チツ!』』

自分で言っただけ、今の言葉ものすごい嫌味だ。

「うう、他のしょばいやツなんかより風巻くんには勝ちたいの!」

そいつはまた、すごい嫌味だ。

「ねえ、風巻くん!」

部活が終わった帰り道、会長に呼び止められた。

「なんですか?」

「えへっ、次は絶対勝つてやるんだから!」

「まだ言っんですか!もうしっかりと伝わっています!」

「あ、そうそう。これからわたしを“会長”って呼ばないで。」

「はい?」

「“ 漣 ” っ て呼んでね。彼女なんだから。」

「はいはい…漣、わかったから。」

「わたしは“ 奈於ちゃん ” っ て呼ぶから。」

「僕を女子扱いするんですか！？だれも男だっ て認めてもらえない
！」

「大丈夫、奈於ちゃんは男の娘だから。」

「もうだめだ！」

だれか僕を男っ て認めてもらえる人はいないのかな…。

「あははっ、これからもよろしくね、奈於ちゃん。」

「うう…よろしくね、漣…。」

漣は上機嫌で帰っ ていった。なんだかんだ漣は噂とは違っ て

かなりお茶目なのじゃないのかな？

とにかく、自由形で会長…漣に負けないうちにしないと。

1 - 2 脅威のタイム測定（後書き）

この元1 - 3部分全部書き換えました。
大変だった…

1 - 3 アイツのフォトグラフ（前書き）

早く話数追いつかないとたいへんなことになるかも
ああ、宿題が…

1 - 3 アイツのフォトグラフ

「おはよう、晃弘。」

「おお、風巻、おはよう。」

昨日のタイム測定の翌日、いっしょのクラスの晃弘は、

今日もまた怪しげな商売をやっていた。

「今度はなに売ってるんだ…。」

「会長の競泳用水着写真。これは売れるぜ。」

「いつ撮ったんだ…？」

「将軍が職員室に戻っていった時さ。」

こいつはよく写真を撮って人に売っている。特に噂名高い女子の写真が多い。

ちなみにこの学校はカメラとアイポッドの持込みが許されている不思議な学校だ。

なので僕も登校時には音楽を聴いているんだけど…。

「おまえの行為ばれたら絶対持ち込み禁止になるぞ…。」

悪く言えば？盗撮？だからねこれ。

「大丈夫。お得意さま限定なんだから、まだばれたりしてない。」

けれどこいつの写真はとても綺麗だ。風景、人物の様々な特徴の全てを

機械のなかに収めている。僕も見せてもらったことがあるけど、これはかなり人が

集まってくるわけだ、と納得できた。

「会長の写真はもともとから人気だったんだが、こいつはまた大ヒット御礼かも。」

「これがばれたら処刑同然だと思う。」

「ちなみに今の一番人気は、風巻の着替え写真だ。」

「ちょっと！なにやってんだ！」

さては水泳部の更衣室で何度も撮ってたんだな！彼は誰にも気付かれずに

写真を撮ってくるからな…。

ちなみに胸がどうこう言われているけど、競泳用の水着は全身仕様なので変にとらわれない。

小学生のときに海水浴行ったとき、海パンで行ったら警察沙汰になったしね…

「ちなみにこれがその着替え写真だ。」

その写真を見た時に、僕の眠気が一気に吹っ飛んだ。

な…なんというか…僕こんな表情してたか？

男子のくせにか色っぽくて…そ…なんというか…自分のくせにかわいい…。

改めて、自分の女子顔はほんと底知れないほど不幸だと思った。

「ほー、奈於くんの着替え写真ね…。」

いつのまにか隣には、僕とは対照的な男前が写真を覗いてた。

「わ！慎也いつのまに！」

「そんなに驚くことないだろう。」

こいつはこの前僕らの漫才のあとに声をかけた海野原慎也だ。実は同じクラスなのだ。

たしか…テニス部だっけ？レギュラーにも入ってて頭もいいし、友

達も多い

完璧超人だ。もちろん身近にもう一人超人はいるんだけど…。

彼とは幼馴染で、唯一僕を「奈於くん」って男子扱いしてくれるいい友達だ。

「この写真いいね。晃弘くん、今度フィギュア作って僕に売ってよ。」

少し距離をおいておいたほうがいいかもしれない。

「昨日の漣ちゃんはすごかったらしいね。」

「え？知ってるの？」

「あれはネタになるでしょ。全国レベルの奈於ちゃんと肩を並ぶ実力なんだから。」

「ていうか慎也は二年のとき会長と同じクラスだったんだろ？」

「え？そうなの？」

「ああ。二学期から転校してきてね、みんなメロメロだったよ。」

けれどあまりにも能力が高すぎるし、アタックした人はみんなひどい目にあっただらしいし、

地元のヤンキーに襲われた時は、返り討ちにあわせたらしいしね。」

昨日の印象が、がらりと音をたてて変わった。

「だからいつも一人で寂しそうでさ…僕が話しかけたら、そりゃもうテンション

高くて、今もけっこう仲がいいんだよ。」

「漣は前からお茶目系だった？」

「もちろん。噂の印象からは全然違うよ。まあ何度か関節技をやられたけど…」

「まって慎也。関節技って…？」

「……………」

「ねえ！何でそこで黙っちゃうの！？なんか怖いよ！」

「まあ付き合って損はない。楽しく過ごしてくれ。」

「そこでスルースキルを使わないで！」

僕はこれから関節技に恐怖を抱きながら生活しなければいけないのか…。

「あ、それと漣の好物はチーズケーキだ、参考にでもしといて。」

そのとき担任の先生がきて、ホームルームが始まった。

今日は将軍が出張のため、部活はなかったので、くされ縁の部活をのぞきにいった。

総員3名、そして全員知り合いのパソコン部だ。賞もたくさんとっていて、

パソコン部門では、全国一との噂もあるという。

「失礼します。」

「おっ！風巻！」

「風巻先輩！」

「…久しぶりね。」

唯一の男子でパソコン部部長の坂本翔。ありがちな名前だとも思う。

微妙にかっこいいけどそうとうのナルシストだ。たいがい「俺天才」っていつも

言ってる気がする。実質バカで運動オンチでアニオタだ。けれど機械工学と

アニメーション作成は企業レベル。実際就職も決まっている有能なやつだ。

「風巻先輩」と僕を呼んだのは、中学2年生の沫雪莢香だ。ふわふわとした髪で

小柄な彼女は機械修理屋さんの家庭で育ち、彼女自身も修理ができる。

基本なんでも修理でき、しかも僕らには只でやってくれるので優しい子だと

感動する。料理も上手でクッキー焼いてくれたりもしてくれた。うれしい後輩です。

おとなしい感じであいさつをしたのは河本真夏だ。実は僕の幼馴染だ。

昔は明るい感じだったのに、今は…

実は彼女は元水泳部だった。種目は百メートルの背泳ぎで、一回だけ一分〇三と女子中学記録を抜いたことがあるほどだ。その正式なタイムを

とる直前に…事件はおこったのだ。

河本家が襲われたのだ。

親や弟、みんな殺された。真夏をのぞいて。

彼女自身も重傷を負い、泳げなくなってしまったのだ。彼女はとてつもない

絶望と孤独に苦しみ、？うつ？に陥ったのだ。

そう、僕が人を恐れて引きこもったように…。

僕が立ち直った時、彼女も僕に負けじとがんばって学校に行けるようになった。

けれど昔のような輝きは残っていなかった。

「そうだ！見せたいものがある。」

「ん？なに？」

翔はとある大手ネット小説サイトを開いた。

「これは…水泳小説？」

「…私が書いたの。」

「えっ？」

「…一度泳げなくなった少年が、再起に臨むおはなし。…描いてみて。」

「実際、かなり評価が高いんですよ。今は人気トップ10入りなんです。」

「すごいじゃん！」

「えへっ…。」

さすがにうれしいのか、照れてるようだった。

でもそれで真夏は幸せではないだろう。きっとそのうれしさも、嘘かもしれない。

今でも僕は人が恐くなって、息苦しくなることもある。

「あたしもこんな素敵な小説、書いてみたいです。」

「僕もそう思ったよ。」

それにしても…この主人公、真夏の写し鏡のようだ。もしかしたら…真夏は

泳ぐことをもう一度望んでいるのだろうか？

1 - 3 アイツのフォトグラフ（後書き）

正直いって改稿作業やってよかったとおもっています

1 - 4 総合水泳大会の日（前書き）

「風巻の着替え写真1枚600円（税込み）だぞー。」

「高っ！しかも男の写真売れるわけが…」

ドドドドド！パシャ！「まいどー…」

「……………」

「…なあ風巻。」

「うん…？」

「事態は思ったより深刻のようだ。」

風巻の着替え写真100枚 30秒で完売。

1 - 4 総合水泳大会の日

総合水泳大会当日の朝、夢見心地のまま目が覚めた。

カレンダーを見て現実に戻される。今日は大会だったな…。

久しぶりに彼女の夢を見た。中学生にもなって二人で公園のベンチで座ってお話したり、

図書館に行つていっしょに本を読んだり、勉強したりして…

彼女との思い出は、可憐な薔薇のように美しく、楽しくもあった。

けれど花びらが一輪一輪散っていくように美しい時間は散り消えて、とげが行く手を阻むがごとく、彼女に触れることなどできなくなつた。

そういえば、この前久しぶりに真夏に会ったとき、少しだけ彼女を思い出して

しまったんだ。どこか似たような気がして…。

…ああ、そういえば彼女も水泳もやってたんだ。彼女は僕に？泳ぐ？ということを

教えてくれたんだ。毎日が、毎日が幸せだったのに…。

どこで間違ったのか、どうすればあのまま幸せでいられたのか、もう分からない。

だからこの思い出は、これからもずっと心の奥にしまいこみ、忘れ去ってしまおう。

そうして、トーストを口にくわえながら、急いで家を出た。

バス停には、すでに晃弘がベンチに座っていた。

「お、晃弘！おはよう。」

「風巻か。けっこう遅かったな。」

会場となる他校へは、山の上にあるので、ここからはバスで行くほかない。

僕らはしばらくしてから、到着したバスに乗った。

「ねえ、こうやって窓越しに山の上から景色を見るのって、とんでもなくすばらしいと思わない？」

「……思っものか!…」

晃弘は重度の乗り物酔い症だ。飛行機なんて乗ることなど不可能だろう。

「そういえば、ちゃんと酔い止め飲んできた?」

「それが朝けっこう急いでな…家で飲み忘れたんだ。」

「ええ、ここで吐かないでよ。」

「大丈夫だ、いつも右足のズボンのポケットに酔い止めが仕込んである。」

そう言うとき、晃弘は、酔い止めと書かれた箱を取り出した。

「さて…あれ?」

「ん?どうしたの?」

「実はな……薬をきらしてたんだっ…」

その後、僕の視界は真っ白に染まった気がした。

「大会当日になんてことしてくれたんだ…。」

「すまんな風巻…処理手伝ってもらって。」

あの時の絵面は、ひどいもんだった…。

しばらく歩いて会場となる学校に着いたら、もう澪が待っていた。

「二人ともー！」

「おはよう澪、はいね。」

「今来たばかりだよ。あ、これ食べていってね。」

澪は箱から、型の果物を出した。

「これは…？」

「スターフルーツ。南国でとれる果物よ。」

それは、とても甘酸っぱく、目が覚めるほどおいしかった。

「これ一発で好きになったわ。」

「おいしい！」

「気に入ってくれた？」

「うん、ありがとう、澪。」

こんな優しい女の子が関節技を行使するはずがない。

今大会はリレーなど団体種目はなく、ただ単に個人種目だけやり通すという変わった大会だ。

すぐ一カ月後には一年に一度の町内文化体育大会が開かれることも関わっている。

ちなみにその大会で標準記録を超えた選手は県大会、そこからさらに全国へと駒を進んでいける。

今大会は先がないので、ただ優勝を狙うのみだ。

「風巻せんぱい。がんばってー！」

上からは莢香の声援が聞こえた。どうやらパソコン部が全員で応援に来てくれたらしい。

といつても三人だけなんだけれどね。

「えー、それでは五十メートル自由形男子の部に出場する選手は、それぞれの位置についてください。」

係員の指示により、僕は飛び込み台に立った。

いつもとは違う空気に緊張を覚えるが、みなぎる自信のほうが自分を強く支配していた。

「えー、位置について…」

狙いは一つ！優勝のみ！

「よーい！」

「おつかれ風巻。余裕だったな。」

会場のお客さんは、全視線を僕に向けていたらしい。他の選手など雑魚同然だね。

「さて、そろそろ会長の出番だな。」

「え？ 晃弘は？」

「おまえが控えのときに泳いだ。結果は三位だった。」

「そうなのか。」

「きさまの人生は俺の手によって断ち切られたいのか。」

あれ？ 率直な感想を述べただけなのに…。

「それよりも会長が、ほら。」

すると、漕が台の上でもうスタートの準備をしていた。

「よいい」　パン！

やっぱり飛び込み距離は10メートルあった！…けど、様子が変だ。

前見たような抵抗0のペンギンのような軽やかな泳ぎではなく、力任せで、雑な泳ぎになっていた。

まるでがくような…渦潮から必死ではい上がろうとしているよう

だった。

結局一位だったのだが、タイムは二十九秒四三と下がっていた。

「なんか…緊張しちゃった。」

「まあしょうがないよ。初めての大会だったんだから。」

「…うん。そうだね。」

その後僕らは表彰を受け、整ってもない協会側のあいさつを聞き流して

それぞれの自宅へ向かった。

なお、帰りのバスでもあいつは吐いた。さっきエチケット袋用意しておいてよかった…。

1 - 4 総合水泳大会の日（後書き）

前書きの短編はこれから毎回やろうと思う。

1 - 5 突然の電話2本（前書き）

「はぁ…疲れたな。今日は1日中寝るか…。」

p r r r !

「はいもしもし?。」

「はい、こちらは風巻奈於ちゃんのお宅でしょうか?。」

「ま!まさか…。」

1 - 5 突然の電話2本

翌日、大会休みで家の中にいた僕は、海外にいる我が家の最強魔人と連絡を取り合っていた。

「久しぶりね、奈於ちゃん。」

「どうしてこのタイミングで電話してくるの…。」

話しているのは僕の姉さんの風巻茜だ。しまきあかね

二十二歳で僕がなぜ女子顔になったのか納得できるほど美人なんだけど…

歌がものすごい上手いので、ヨーロッパ留学で歌の修行に出ている。ちなみに僕も歌は人よりは上手いらしい。僕にはよく分からないけど。

「姉さんは今どこにいるの？」

「私は今、ウィーンで奈於ちゃんよりも若い子供たちといっしょに歌ってますよ。」

みんな白い服着ててかわいいですよ。」

「…姉さん、よくそんな子供たちといっしょに歌えたね。」

「私は国際派ですからね。」

姉さんはロリコンにシヨタコンに、ブラコン（ブラザーコンプレックス）という完璧異常者、

もとい変質者だ。そっちの意味ではある意味国際派だろう。

「今さらつと姉さんの悪口を流さなかった？」

「まさか、そんなことないよ。」

受話器の奥からミシミシという音が聞こえてくるのは幻聴だろう。

「そんなことより奈於ちゃんは、学校楽しんでる？」

「うん。昨日は大会で優勝したんだ。」

「すごい！今すぐ抱きつきに行きたいわ！」

「あなたは子供たちと歌うべきだ！」

ほんとにこの姉は…けれど両親は外国のホテルで火事に遭い、逃げ遅れて死んでしまった。

姉が向こうにいるので、今は実質1人暮らしだ。生活費は姉から一ヶ月に三万円が支給される。

学費は両親の残した大量の貯金から引き落とされるので、なんとか節約生活でやりくりしている。

そのおかげかどうか分からないが、料理はどんな食材でもおいしく作ることができる。

ただし見た目がひどい。

けれど姉はどんなものでも作ることができる。

ただし材料が食べ物じゃない可能性が高い。

「そうそう、晃弘くんたちとは仲良くしてる?」

「うん。おかげさまで...」

ここで湊のことを言おうか迷っていた。でも心配かけるし、妬く可能性も捨てきれない。

家に帰ってくる可能性も...それだけは避けたい結果だ!

「どうしたの?」

「いや...その...」

「実は彼女とかできたとか?」

鋭い!昔から妙に勘が冴えているから...。別に彼女でもないのに、彼女という言葉に敏感になってしまう。

「あ、これはいそうですね。」

まずい！疑惑に変わってしまった！必死で誤魔化しの言葉を考える。

「そうなのね…ついに奈於ちゃんにも…」

ああ、もう！なにか言わないと！僕はこう言い訳をした。

「僕はウサギに恋してしまったんだ。」

どうして言い訳がワンパターンなんだろう。

「そうなの…宇沙木ちゃんって女の子が好きなのね。」

この姉もこの上なくバカだ。

「ちがう…ウチの学校の生徒会長がアタックしてくるんだよ…。」

もうなにもかも勘違いされたら困るので、経緯を全部話した。

「そうなの…楽しそうな子ね。」

「そ、そうなんだ…楽しそうなんだ…。」

「うん。じゃあ姉さんは四日後に帰るとしますわ。」

「……え？」

「今日はそのために電話してきたんだから。」

ガチャ ツーツー

「最悪だあああ！」

なして！あの姉との共同生活ってろくな目にあわないんだから！

p r r r r r !

「はい…もしもし…」

「奈於くん？」

「慎也か…いま落ち込んでる…」

「澪ちゃんのこと、知ってるんだ。なら話が早い。」

「…はい？澪がどうしたの？」

こうして僕は落ち込むより焦りの気持ちで慎也の家にやって来た。
実は慎也の家は整形外科なのだ。つくづくエリート道なのが腹立たしい。

けどそう思っている暇はない。だって…

五〇五室

「樹雨」

漣は入院したのだから。

「奈於ちゃん…」

「ご覧の通りだ。複雑骨折のようだ。」

そこには、ベッドの上で右足を吊り上げられた漣の姿があった。まさか昨日の…

「奈於ちゃんの考えていることの通りだと思う。発端はあのとき飛び込んだときに足がつってしまったの。」

「え？じゃあ骨折は？」

「帰り道よ。わたしは自転車で来ていたから足がもつれてしまって、転んでしまって15メートルほど転がってしまったの。」

足がつつてもあのスピードは異常だ。よほど負荷がかかったんだと思う。

「…奈於！」

すると晃弘が汗だくでやって来た。

「晃弘も来たんだ…。」

「まさかとは思ったが…これはしばらく泳げないな…。」

「うん…町内文化体育大会は出られないわ…。」

「慎也。退院はいつできそうなの？」

「二週間以内には出来ると思うけど…澪ちゃんのがんばり次第だね。」

「みんな…わたしを心配してくれてありがとう…。」

すると二人は、

「型フルーツのお礼。おいしかったぜ！」

「澪ちゃんがいないと、学校に盛り上がり欠けるしね。」

慎也はともかく、晃弘が会ったばかりの澪に打ち解けているとは驚いた。

「こっちはまだきこちないのに。」

「さて、少し慎也と話をしてくる。なにがあつたのか聞かせてもらえるか？」

「いいよ。ごめんな奈於くん、澪の面倒を見ててくれる？」

「うん、いいよ。」

二人は病室を出て行った。ってこれって…

「二人きりになっちゃったね…。」

完璧なるフラグが立ったね、この展開。

「…ありがとう。見舞いに来てくれて。」

「大丈夫なんですか？リハビリも大変でしょう。」

「わたしなら一週間で回復できるわ！」

「ムリはしないでくださいよ。」

「まあ、見てなさい。そういえば、家でなにかあつたの？慎也くんが『奈於くんなんか落ち込んだ。』って言ってたけど…。」

「姉さんが帰ってくるんだ。…変態の。」

「まあ、楽しそうね。」

「あれ…同じ感想だ。」

「へ？」

「姉さんに洩のことを暴露させられたら、楽しそうな子ねって…。」

「もしかしたら、気があうのかもしれないわね。」

「そうかもね。」

病室の窓からは、金色の光が差し込んでいる。もう夕方で、空にも赤みを帯びていた。

茜色の綺麗な空が、名前からか姉さんを思わせて、少し寒気がした。

「それじゃ、僕はそろそろ行くね。」

「なにか予定でもあるの？」

「ありますよ…いろいろ準備しなければならないですし…。」

「くすつ、ご愁傷さま。」

「あなたにその言葉を言われようとは…。」

「あ、そうだったね。」

「明日もお見舞いに行きますから、どうかムリしないでくださいね。」

「はいはい。」

1 - 5 突然の電話2本（後書き）

ココから猛烈に加速していきます。
明日2話ぶんのせるぞー！

1 - 6 人についての概念（前書き）

「慎也、さくたんが合宿から帰ったんだって。」

「なかなか楽しかったらしいね。そういえばさくたんからこんなものが届いたのだ。」

「ん？なにこれ？」

「『奈於ちゃんの似顔絵』だって、公表許可……」

「わー！妙に似てるしやめて！」

いつか公表できたらと…

1 - 6 人についての概念

「へえ、今日もお見舞いに行くんだ。」

翌日の朝、ものすごい冷やかしの眼差しで見てくるのは、クラスメイトの樫沢からさわさんだ。

実は澪の数少ない友人だったりする。いわゆる「ボク少女」のかっこいい女の子で、

かなり女子にモテる。友達の多さは学校の壁を越えるとの噂だ。

「いいな澪ちゃんは、ボクも奈於ちゃんのような彼女が欲しいよ。」

「ごめんね。僕は男だし、澪は同性愛者でもないよ。」

「あ、そうだね。澪ちゃんは同性愛なんか微塵も興味ないもんね。」

僕が男ということは肯定しないんだ…。

「でも樫沢さんが入院したら、かなりの人数が見舞いに来そうだね。」

「あはは。実際澪ちゃんのように骨折したことがあったんだけど、

病室に人が入れなくなっちゃって。」

そんな栞沢さんは一年生の時に同じクラスになったのだ。僕に対しての第一声が、

『きみ彼氏いる?』

なので忘れるはずがない。そして、夏に僕がああの自殺事件で引きこもってしまったとき、

誰よりも心配してくれたのが栞沢さんだった。

僕を救ってくれた人々の中でも特に感謝をしている一人だ。

そして三年生でまた一緒にクラスになったのだ。

「じゃあ澪ちゃんによろしくね。」

「え?栞沢さんはお見舞いに行かないの?」

「それはだって…クスッ。」

「え?」

そこで朝のホームルームのチャイムが鳴った。

栞沢さん…澪と喧嘩でも…してはないよね。

「失礼しまーす。」

「あ！奈於ちゃん！」

「元気そうですね。リハビリがんばってますか？」

「うん！あと1週間すれば退院できるけど、もう以前のように速く泳げないわ。」

「つまりライバルが減ったと…。」

「こら、いじわる言わないの〜。」

「冗談ですよ。」

「うう〜…でも応援してあげるから。」

「はは…よろしくおねがいします。」

「もちろん？彼女？として、ね」

「はい？」

そういえば僕は、漣の彼氏に“させられた”のだった。

言い換えれば、僕と漣の関係はいつ壊れてもおかしくはない。

僕はまだ漣を彼女だとは言えない状態だ。

恐いのだ。“人”を愛することが。かつて僕は一人の少女を愛したのだ。

それは言葉では表しきれないほどに。ただその愛はもろくも崩れ、大きな絶望を味わった。

僕は再びあの苦痛を味わいたくない。僕は人を愛せない。

けれど漣は僕の？彼女？になろうとしている。それは漣にとって幸福なことなのかもしれない。

けれど漣は、僕の過去を知らない。僕の絶望を知ってはいないのだ。

きっと僕を愛せば、彼女は不幸になる。そして、僕も苦しむだろう。

でも最近変わってきたことがある。みんなと話していると、なんだから楽しい。

かつては“人”と話すことを拒絶してきたのに、今では晃弘や慎也、

翔、莢香、真夏に椀沢さん、

そして漣たち、クラスのみんなとのたわいのない会話がとても楽しい。

そう思わせたのが、漣との会話だった。彼女だからこそ、楽しかせたのかもしれない。

だから漣を大事にしてあげたいと思う。

「あ、よかったらこれ食べてください。」

僕は漣に買ってきたチーズケーキを渡した。

「わあ！私の大好物！ありがとうございます！」

漣はなんの遠慮もなく、食べ始めた。しっとりとしたチーズのクリームが漣の口の中に

吸い込まれていく。彼女は「天使」という言葉が似合うほどの笑顔を見せた。

「おいし〜。ほんとにありがとう。」

なんだかむずかゆかった。人にお礼を言われてもそんなことは今までなかった。

それは不思議な気分だった。

「ああ〜おいしかった。ねえ、お願いがあるんだけど…。」

「なんですか？」

「このケーキこれから二切れ毎日持つてきてくれない？」

「はい…？」

「あ、いいの？ありがとう、さすが奈於ちゃん！」

「へ？…あ、うん。じゃあ、お大事にね…。」

ガチャ バタン

いいんだこれで…涙を大事にしてあげないと…ね。

ん？でもあのチーズケーキって一切れ500円だよね？

二切れ1000円×一週間＝7000円

現在僕の食費＋仕送り残高（小遣い）＝7412円

その夜、僕はこれからの調味料を主食とした生活に、恐れおののきながら布団に入った。

1 - 6 人についての概念（後書き）

いつときますけど

1切れ500円のチーズケーキあったら
教えてください！？

1・7 懐かしきもの（前書き）

「姉さん、さくたんは新たに“たくみん”さんと交信をとったらしいね。」

「そうね。メインヒロインに蹴られていたようだけど。」

「うわぁ…かわいそう。」

「そんなたくみんさんの『無の片鱗』もよろしくお願いしますね。」

「姉さん、ちゃっかり宣伝してる…。。」

僕のマイページから閲覧できます！見てくださいね！

茜さんありがとう！

1 - 7 懐かしきもの

目が覚めたのは早朝五時だった。一人用の布団になぜだか窮屈さを感じた。

これから始まる調味料生活に憂鬱さを覚え、落ち込んでいた。

僕の布団の中に下着姿で寝ている女性がいることに気がついたのはそれから五分たったところだ。

「うおい！姉さん！？」

なぜだ！なぜここにいる！あと三日後じゃなかったの！？

「うにゆ…あ、奈於ちゃんおはよう！」

「姉さんなんで下着なの！」

「だって暑いもん…。」

「姉さん…幽霊じゃないよね…？」

「なに言ってるの奈於ちゃん。世界で一番愛してる奈於ちゃんのだ

めに、すぐ帰ってきたのよ。」

吐き気がこみあげてきた。

「はあ…食費が危ないっていうのに。」

「え？今日は奈於ちゃんが料理してくれるんでしょ？」

実は姉さんと留学出発前に、『帰ったら奈於ちゃんが手料理を振舞う』という約束をしたのだ。

僕が引きこもった時にも姉さんは帰ってきてくれたのだが、料理など出来ない状態だった。

僕は溼が今入院していること、チーズケーキをねだられていることを話した。

「というわけで食費がどうにもならないんだ。」

「うん…。」

この姉は理解できたのだろうか…。

「…そうね。だったら…」

だったら？

「姉さんを一番愛してるって言って」

車にひかれてくれたらいいのに。

「冗談。奈於ちゃんの料理を食いたいし、チーズケーキは買っ
てあげる。」

「え？いいの？」

「でも今日は私とお見舞いに行ってくれない？」

「別にいいけど…。」

「じゃああの駄菓子屋で待ってるね。」

「うん。じゃあ六時に来て。」

部活が終わり、急ぎ足で学校近くの駄菓子屋さんへ向かった。

といっても一年前につぶれちゃったんだけど。

5分もたたないうちに着いた。姉さんはまだ着てない。

廃れきった建物を見て、昔はよく姉さんといっしょにここに来たことを思い出した。

駄菓子であたりがあつたら自慢しあつたり、夏になるとカキ氷を食べたり、

道行く人に『お嬢さんたち、姉妹かな?』とか訊ねられたり。

彼女ができてからは、ここに行くことなんてなかったからな…。

「おまたせ。」

どうやら姉さんが来たようだ。白いワンピースにサンダル、この格好でよくここに来ていた。

でも…

どう見ても二十二歳には見えないほど現役学生にしか見えない！

「それじゃ、行きましょう。」

改めて、僕のこの顔は姉譲りなんだな…と皮肉に思った。

慎也の病院は歩いて十五分ぐらいだった。

「慎也くんは元気してるのかな。」

「それがどうかしたの？」

「気になるじゃない、幼馴染だし、恩人でしょ？」

「うん…元気だから大丈夫だよ。」

思えば慎也や晃弘、姉さんにもたくさん迷惑をかけてしまった。

恩返しのためにも、くじけず生きていこう。

「そっぴや姉さん。どうしていつしよにお見舞いなんて言ったの？」

「奈於ちゃんの彼女に会ってみたくて。」

「だから勘違いだつて…！」

僕は五〇五室の扉を開けた。

「失礼します。」

「はい…あ、奈於ちゃん！あれ？そちらは…お姉さん？」

「はい。茜といいます。よろしくね。」

「樹雨漣です。高校生でいらっしゃいますか？」

みんな高校生だと思うんだ…。

「あはは。もう大学も出ていますし、この前ウィーンから帰ってきたところですよ。」

「ええ！それじゃあ…」

二人はとても楽しそうに話し始めた。ここは僕のいる場所じゃないな…。

病室を出たら、慎也に会った。

「あ、奈於くんお見舞いに来た？」

「うん。姉さんと。」

「茜さん、帰ってきたんだ、今どこに？」

「零と話してたよ。僕は席をはずしたんだ。」

「そうか。あ、茜さんによろしくね。」

「うん。」

そのあと僕は間違えてブラックの缶コーヒーを買ってしまい、苦さに悶絶しながら姉さんを待った。

家に帰り、姉さんに振る舞う料理を作り始めた。

『手羽唐』。

これが作れなければ風巻家ではないと云われている我が家の伝統的なメニューー

ってお母さんが勝手に決めたのだ。

僕が唯一見た目も味もよく出来るものだ。

その懐かしい手羽唐を姉さんに食べさせよう。

買ってきた手羽先肉の間接を切り離す。そのあとにフライパンに広めた

オリーブオイルの中に入れて揚げる。そしてタレを絡めるのだが、タレはすき焼きのたれを混ぜたものを使用。あれは何でも使える上に甘みが増すので非常に便利だ。

そして二人分には少し多いくらい揚げて、食卓にあげた。

「約束どおり、作ったよ。」

黄金色に揚がった唐揚げに、純といえるきれいな茶色のタレがかかったその姿は、

申し分のないほどおいしそうであった。

「「いただきまーす」」

やわらかいとりにくと、甘辛いタレがほどよく絡み合い、香りとともに極上の味わいが口いっぱいに広がった。

「うまい！」

姉さんも満面の笑みを浮かべた。

「おいしいわ。懐かしい味ね。」

料理人はこの瞬間をみることに生きがいなんだと言っていたけど、その理由はよく分かる。僕は今この瞬間幸せになった。

「すごいわ奈於ちゃん！私も負けなくらいの料理を振る舞ってあげたい！」

僕が姉との共同生活を送るのを嫌がった理由。それがこれだ。

「まって！これから一緒に作るってのはどう！？」

理由は一つ、食べ物じゃない可能性が高いからだ。

見た目は一流料理そのままだが、材料が大分おかしいのだ。

「そうねー。それもいいかも。奈於ちゃんとの料理楽しそう。」

「でしょ？ぼ、僕も楽しみだなあ。」

これでいくらか救われるのなら、仕方のないことだ。

「いっしょに料理だったら、どんな卑猥なことしてもいいのよね
……」

だからいやなんだ。

1 - 7 懐かしきもの（後書き）

なんかごめん。

宣伝入れちゃって。

でもおもしろいですよー

1 - 8 駆られ、失踪（前書き）

「莢香、さくたんが喜んでいることがあるんだって。」

「なんでしよう？」

「友達のマスクメロンさんの“角でぶつかつたのは宇宙人”で、その中のさくたんの一番好きなキャラの緑紅葉さんが使われていたんだ！」

「へえ〜！ようやくでましたか！」

「そうだね！ようやく出番が来たね！」

「さくたん、よかったですね。」

「君はなんて優しいんだ…すごいどうでもいいことなのに。」

そんなわけで、マスクメロンさんありがとう！

1 - 8 駆られ、失踪

「僕の安息の世界はどこにあるんだろう。」

「どうしたんだ風巻。えんま様も青ざめるような絶望的表情を浮かべて。」

姉さんのちゅーから逃れた僕は、少し早く登校した。

「茜さんか…また会ってみたいな。」

「それ慎也も言ってた。」

「僕を呼んだ？」

「呼んでない！ていうかいつ来たの！？」

「まあね…晃弘。」

「ん？ああ、あれか。」

そして二人は廊下へ出て行った。なんなんだろう？

「…例のあれは？」

「ああ、ばつちり。ほらよ。」

「おお！かわいい！うまくできてるね！」

「だろ？翔と莢香もすごいよな。この写真からフィギュア作れるなんて。」

二人のかすかな話し声からは、ただならぬものを感じた。

ガラガラ

「ごめんね、待った？」

「いったいなんの取引をしていたんだ？」

「……（ポツ）」

「え！？なんで頬を赤らめるの！？なにを買ったんだ！」

まさかあの着替え写真…慎也も買ったのか？

そろそろ人が集まってきたので、自分の席に着いた。

今日の晩御飯はなににしようかと、現役学生ではあまり存在しない考えに頭を悩ましていると、

《ピンポンパンポーン、えー、緊急放送です。》

緊急放送だろうがこのクラスは騒がしい。どうせろくな内容じゃないしな…。

《三年二組の河本真夏が行方不明となりました。》

一瞬で学校全体は静寂に包まれた。

《昨日の夜、真夏の居候先に、真夏が帰ってこないと連絡が入り、現在職員による

搜索が行われております。場合によっては警察にも行方不明届けを提出します。

また情報が入り次第…》

ダンッ ガラガラ

放送が終わらないうちに、僕は廊下を疾駆していた。

慎也と晃弘も教室を飛び出し、翔と莢香とも合流した。

「真夏が行方不明って…。」

「最近部活にも来てなかったし、姿もあまり見かけなかった!」

「あたしは一昨日河本先輩を見かけたんですけど、なんか覇気がないというか…」

「元気がない感じでした。」

全く分からない。どうして真夏はいなくなったんだ？

「とにかく探そう。」

「先生！」

僕は社会の斉藤先生を見つけた。

「奈於！慎也、晃弘も！早く学校へ戻りなさい！」

「見つからないでしょ？いつしよに探しますよ。」

先生はやれやれとため息をつき、

「これをもってなさい。新たな情報が入ったら連絡を入れる。」

先生はプリペイドケータイを僕に渡した。

「ありがとうございます！」

そして学校周辺を走り回ったが、十二時になっても見つからなかった。

P r r r !

「はい。もしもし。」

『奈於か、一回学校に戻ろう。ご飯はちゃんととらないと。』

「はい…そうしましょう。」

『それで…ん？なに？目撃情報…？』

「目撃情報ですか！？」

『ああ、どうやら海野原整形外科周辺で真夏を見たという人が…』

慎也の病院近く？まさかとは思うが…

「わかりました！今から向かいます！」

『あ！ちよつと…』

ピッ

その考えに確信はない。だが、行くしかないのだ。

「…今から漣に会いに行く。そこに真夏がいたかもしれない。」

十五分後、僕は病院の談話室にいた。

「河本真夏ちゃんが行方不明…。」

「そう。漣のところには来てないよね？」

「うん。今日はだれもまだ来てなかったし…。」

来てるわけないよな…肩を落としていると、

「ねえ坂本翔くんに沫雪莢香ちゃん。最近真夏ちゃんになにか変わった様子はなかった？」

「うん…最後に見た時は生命力がない感じでしたけど…。」

「そういえばこのあいだの水泳大会の応援に行ったとき、なにか虚ろな目をしていた気がする。」

その前はすごい険相でパソコンに睨んでいたし…。」

「うん…生命力に欠ける…虚ろ…」

漣はどこかの探偵かのごとく考えに耽っている。

でも僕はそれ以前に、今日の漣になにか違和感を覚えていた。

普段の漣の病室からは、水仙の花の香りがしたのに、今日はなんと
いうか…

なにか嗅いだ事のある、懐かしい香りが混ざってたのだ。

こういうのってたいがい『誰か来ていた』ってことになると思うんだけれど、

ほんとに漣のところにだれも来ていないのか？

「…真夏ちゃんは、元水泳部だったそうね。」

「はい。」

「きっと、もう一度泳ぎたかったんじゃないの？」

もういちど、泳ぎたかった…あれ？

「あー！そういえば真夏の水泳小説！真夏の話と酷似していたような…。」

「ならなおさらそうね。きっと市営プール、もしくは学校のプールにいると思う。」

学校にいるはずなら、今頃見つかっているはずだ。

ならば市営プールにいる確立の方が大きいと思う。もちろん、あてにならない勘なんだけれど。

「なら、今すぐ向かいます！」

「あ、あとね、実は真…」

漣の声は、僕が廊下を駆ける音で消されていった。

市営プールはここから少し距離があるので、バスで移動するのが常識的なのだが、僕は走っていた。

理由は、バスのダイヤが今の時間にあってないことと、お金を持っていないからだ。

それでも僕は、自分でもおどろくくらい速く走っていた。

両足にズキズキとうなりをあげていた、けれどそんな意識も忘れるほど、無我夢中で走っていた。

どうして僕はここまでして真夏を見つけようとしているのだろうか？

もう自分でもおかしいと思う。けれどなにか嫌な予感がするのだ。

早く見つけないと、天罰がくだりそうで…

気がついたときには着いていた、どれくらい長く走ったのだろうか？

今日は営業していないのだが、外から入ることが出来る。

柵を乗り越え、敷地内にあるベンチに腰掛けた。足がいたい…ここ

にも真夏はいないのか…

それを最後に、過労によって僕の意識はそこで途絶えた。

ふと、懐かしい香りがしてきた。なにか嗅ぎ覚えのある、あたたかい香り…。

あの病室でも感じた香り、水仙の香りと混ざっていた香り。思い出そう。思い出そう。その香りはなんなのか。

その香りは僕に何をもたらしたのか。

想像の世界が広がっていく。僕はだれかと手をつないでいる。僕はその子と笑いあい、泣き合い、励ましあったりしながら。この気持ちは懐かしい、彼女と過ごした…彼女と？

そつだこれは…彼女の香りだ！あの病室の香りは、彼女のものだった！！

彼女の手が離れていく！彼女は真っ逆さまにおちていく…！！

「奈於…？」

ふと目を開けると、制服姿のセミロング女子が、僕をまじまじと見つめていた。

「…真夏！？」

1 - 8 駆られ、失踪（後書き）

僕は緑髪が大好きなんだい！

1 - 9 人が恐い（前書き）

前回のあらすじ

なんかありがちな打ち切りエンドだったよね。

1 - 9 人が恐い

「奈於…どうしてここに？」

「真夏こそ、どこに行ってたんだ。」

「私は…泳ぎに…」

どうやら漣の考えは的中していた。けどなぜ今さら？

「なんで泳ぎたくなってたんだ…？」

「…大会で奈於たちの泳ぎを見て…もういちど、泳ぎたい衝動に駆られたの。」

「…そう。」

「……………」

「…なんで家に帰らなかったんだ？」

「…ここで泳ぎの練習したかったの。」

「どうして僕たちに言わなかったんだ!？」

「だってあいつらがなにしてくるか分からないから!」

「あいつら？」

「最近ストーキングしてくる男子生徒が数人いて、手紙をたくさん送ってきたり、

私がだれか男子と話すと、その男子がぼこぼこにされて帰ってきたり…。」

真夏は美人さんなのでそれ相応モテると思う。

でも病み上がりで、ここまで陰湿な行動をすることは最低だと思う。

「…それで目立たないように一人で…。」

「うん…。」

「…で、今日は泳ぐのか？」

「…うん。」

「なんなら、手伝うよ。準備しといてね。」

「…う、うん。」

彼女はそそくさと更衣室へ入っていった。

「…それじゃあクロール25メートル計ってみようか。」

簡単なウォーミングアップを済ませた後、タイムを計ることにした。
彼女のプールでの姿は、とても懐かしい。彼女はあのとき一際目立っていた。

中一にして、全国へ行ったことも大きい。あのときに比べて真夏は、
覇気がなく、

元気な印象が薄れてしまった。

「それじゃ、いくよ。」

「…オッケー。」

「よーい、ドンー！」

バシャン！としぶきをあげ、彼女はとびこんだ。

スタートは悪くないしむしろフォームもいい。なんだ、泳げるじゃないか！

真夏の特徴であるフォームのよさも、昔とはそう変わらないように見えた。

タイムは17秒1。

中学生では十分に速い。

「泳げるじゃん真夏！」

「……」

あれ？黙っちゃった…悪いこと言ったのかな？

「…こんなの私じゃない…私じゃない、私じゃない!!」

僕に向けられた目は、鷹のように鋭く、烈火の如く赤く染まっていた。

「水が鉛のように重くて…昔は空気みたいにすり抜けてく感覚だったのに…」

空を飛んでいる、そんなものだったのに…！」

「久しぶりに泳いだのだから、仕方ないよ。」

「そんな言葉で片付けられる程度じゃない！」

さつきまでの控えめな口調とは逆に、激昂に触れ、怒りと悔しさに目を真っ赤に染めていた。

「だいたいあんたにはわからないでしょう。あなたはこの学校で誰よりも速く泳ぎ、

私のような者を差し置いて、いい気になってるものね。」

「いい気になってなんか…！」

「言い訳しないで！優勝なんてして平然としてたものを！」

真夏の口から放たれるナイフは、鋭く心に突き刺さってくる、

僕は復活を手伝ってくれたみんなのために、全国へ行って恩返しをしようとして、

ここまでがんばってきた。けれどそれが真夏を拒絶へと示すものとなってしまった。

「…どうせ、あんたに私の苦しみなんて、分からないんだよ…。」

(！)

頭の後ろを鈍器で殴られたかのような衝撃が走った。

(利香：！)

思い出したくもない台詞が、過去から引き出され、僕の脳を染め上げていく。

わからない

わからないんだよ

どうせわからない。

同じような境遇をたどった物語の主人公がいたけれど、僕はその主人公のように強くなっていこう。

そう思っていたけれど、過去とは決別できない、それは無理だ。

真夏が死んだ利香に見えた。そしてあの香りが鼻を通ってくる。

ああ、踏んだり蹴ったりだ……

「あ、起きた。」

「ほえ？ 慎也？ ここは？」

「零ちゃんのいるところ。」

まだ日が暮れていない微妙な空がかかっていた。どうやら僕は白い病室の中で寝ていたようだ。

「奈於くん、1日中気絶してたよ。」

「そう…って1日中！？」

腕時計を確認してみると、確かに、六月十七日となっている。昨日

は十六日だったな…。

ぼくはそんなに眠っていたのか。

「いきなり飛び出したんで、あとを追ってみたら、真夏ちゃんはうなだれ、

奈於くんは倒れてたからびっくりしたぞ。」

「ごめん…。」

「気を悪くするな。幼馴染だろ？必死になるさ。」

「そっぴや真夏は？」

「昨日ここでゆっくり休ませて、今は普通に学校へ通ってる。」

「そうか…よかった。」

「そんなことより、なにがあつたんだ？」

「真夏があのに見えて…もういないのに。」

「あのこ？まさか神谷利香か？」

「うん…。」

神谷利香^{かみやりか}。プールのスライダーの登場口、頂上10メートルの高さから

落ちていった、僕の…大切な人だった。

『どうせ私が苦しんでいるの、分からないよね。』

僕に最後に語った言葉は、冷ややかで残酷だった。

「思い出してしまったのか。」

「……」

僕はなにも言葉を発さず、涙を流した。

彼女の死により、僕の情緒不安定は一気に加速した。

彼女が僕に残した言葉は、人間というものの恐ろしさという根をはる、

一生倒れることのない巨木と化した。

そしてその言葉に支配された僕は、人という人を拒絶した。

けれど少しずつ、少しずつ人の温かさに触れ、自分の弱さに気がつき、

みんなに支えられて、どうにか立ち上がることが出来た。

みんなも先生を僕を気遣ったのか、どうも遠慮がちで、穏やかに接してくれた。

けれど晃弘や慎也、椛沢さんは、いつもどおりに接してくれて、この上なくうれしかった。

そして慎也に真夏のことを聞いたのは進級したての十日の日だった。

真夏もまさか僕と同じ境遇にあっていたとは知らなかった。

その日から、パソコン部に出入りするようになり、真夏とたくさん話した。

昔の明るい印象は感じられず、魂が抜け落ちてしまったようだった。でもだんだんと口数が増えていき、笑ってくれる回数も増えていった。

自分はもう、人と普通に接することが出来るんじゃないか。

もう過去とは決別できたんじゃないか。そう思っていた。

けどそれは、単なる幻想にしか過ぎなかった。

どこで道を踏み外したのか分からず、精神状態の行く末をさまよう自分がまだいた。

そして真夏の逆鱗に触れた。

ああ、僕の罪は報われるのでしょうか。

どうしたら、だれも苦しまず、人と接することができるのでしょうか。

か。

自分は日に日に、人を好きになっていきました。

けれど昨日、人の恐ろしさを痛感し、恐ろしさに意識をも失いました。

ああ、もう分からない。

僕はやっぱり人を好きになれません。

1 - 9 人が恐い（後書き）

シリアスですね
はりつめてていいです。

1 - 10 企画部、始動（前書き）

「だりやあああ！」

「うわあ！あなた誰ですか！？」

「ウチは神谷葵。たくみんのほうで世話になつとる。」

「すみません、わたしは河合桃です。今回はこちらに遊びにきました。」

「神谷さんに河合さん？よろしくお願いしますね。」

「よろしくな、あとウチは神やから親切にしてな。」

「…は？」

「は？とはなんや！女子のくせに生意気やぞ！」

「僕は風巻奈於で性別はれっきとした男だ！」

「でも女子の名前やないか。」

「うるさ（殴

「まったく神に無礼やな。」

「…まあ、たくみんさんのなん神を、よろしくおねがいしますね。」

「自分、けっこう腹黒やな…。」

「…死にたいな。」

「光一なぜ出てきたし！」

いつかコラボ短編作りたいです。

次の日の朝、まだ気持ちが落ち着かないため、まだ僕は病院にいた。
でも正直、学校へ帰りたかった。みんなと笑って過ごしていたい。

人を恐れながらも、自分は人を恋しく思っている、

矛盾してるな…

ふらふらと廊下を歩いていると、この病院とは似つかない明るい声が響いてきた。

「奈於ちゃん！」

溼だ。やっぱり元気だなあ。

松葉杖をもっているが、もうすぐ退院できそうな雰囲気だ。

「昨日チーズケーキ持ってこれなくてごめんね。」

「いいの。あ、でもね、茜さんが持ってきてくれて！昨日もおいしくいただきました。」

「え？姉さん来てたの？」

「うん。奈於ちゃんのお姉さん、優しいのね。」

ほんとは重度のド変態なんだよ、とは言えなかった。

いや…信じてもらえないし。

「でもあまり食べ過ぎると、太ってしまいますよ。」

「いやああ！それ気にしてるの！リハビリ毎日がんばっているんだから。」

「がんばってくださいね。僕もそろそろ戻りますから。」

「あ、昨日のことは慎也くんから聞いたけど…大丈夫？」

「あはは。もう大丈夫ですよ。」

「ほんとに？悩み相談はこの生徒会長さまにまかせなさい！」

と、肩をたたかれた。

「そ、そのときは、よろしく願います…。」

なんだろう、すごく頼りがいがありそうだけど、

肩がメシッて音がした気がする。

夕方、「風巻さん？」

と、看護婦さんが僕を呼んだ。

「風巻さん宛てに、手紙が届いてますよ。」

「え？そですか。ありがとうございます。」

だれからだろう？

ラズベリーの花絵がついた封を切り、内容を見ると、

明日の夜18:00に光鳴湾中に来てください。

話したいことがあります。

くれぐれも内密に。

真夏

え？真夏！？

約束の時、僕は複雑な気持ちで学校へ向かった。

なぜ夜に、学校へ呼び出したのか、目的がなんなのか分からない。

真夏は僕に対して、どんな感情を抱いていたんだろう？

嫉妬？怒り？ああ、わからない。

倒れた時、最後になにか言った様な気がするけれど、

正直何を言ったのか覚えていない。

そして、ようやく学校に着いた。

心臓は、妙な鼓動を奏でている。

…それでも、覚悟は決まった。

僕は意を決して、正門を通過した。

すると…

「…へ？」

簡単にいえば、真ん中にランタンがあつて、周りを照らしている。

僕、晃弘、慎也、翔、莢香、そして真夏。

なぜか滯もいて、7人で円になって配置されたいすに座っている。

「えー、ここに集まってもらったのは、真夏ちゃんのためよ。」

「と、いうと？」

「我々7人は、これから発足する“企画部”において…」

「え？それは某アニメにでてくるS「風巻、活動は似ているが、ここでそれを言ったら死刑だ。」

「企画部はまだ非公認団体だけど、今回の企画の行く末次第で、正式に認めてもらうつもりよ。」

「どんな企画なんですかあ？」

「ずばりそれは・・・『真夏ちゃんを全国大会へ出場させる会！』よ！」

「ええ！？全国！？」

「でももう真夏ちゃんは怪我を回復している。つまり不可能ではない。」

それに市の大会まで1ヶ月はあるし、それまでに必死で練習すれば・・・」

「それは真夏ちゃん次第よ。それを企画部が全力でサポートするの。」

なるほど、真夏の劇的復活の裏舞台に徹するわけか。

「私はもう泳げないけど、水泳部のマネージャーに申請しておいたから、

私と風巻くん、水野くんを中心にサポートしてもらうことになるわ。」

パソコン部は、また他の学校の情報や、水泳に関する情報を集めてもらうわ。」

慎也くんは、集まった情報や、現在の状況を整理してもらうわ。」

「なにかあつたら、声をかけてくれ。」

す…すごい。漣の発言力といい、指示の与え方はとても尊敬に値するものだ。

生徒会長はやっていることだけはある。

でもそんな会長について知っているみんなもすごい。

「そういつわけで真夏ちゃん、がんばっていきこうね！」

「…はい。みなさんありがとうございます。」

どこか元気はないが、うれしそうだった。

こうして、企画部の初めての仕事がスタートした。

1 - 10 企画部、始動（後書き）

がらつと急展開。

企画部はこれから大躍進するのかなあ？

あとたくさんさんのなん神も

見てくださいね！

1 - 11 やってきた刺客（前書き）

「そっぴや奈於。さくたんが塾に行つてな。」

「うん。」

「たくみんとマスクメロンの間の席に運良く座れたんだと。」

「それで？」

「授業中たくみんからこんなものが渡されたんだ」

「なにそれ？」

「紙切れなのだが…『やつぱりなおちゃん大好きだwww』」

「うわああ、翔！そのふざけた幻想をぶちこわす！」

「天才の俺を殴りつけるつもりか！？」

「そこでも天才言うのか！？」

ごめんね。マジで笑えたからね。このめっせーじ

1 - 11 やってきた刺客

集会の解散後、僕は澪を病院まで送る道中、真夏のことについていろいろ話した。

「ストーキング？」

「うん。真夏が狙われてるらしいんだ。なにか知らない？」

「…そういえば、なにか怪しい、非公認団体があつた気がするわ。」

「え？何ですか？」

「確か“Love Summer club”簡単に言えば真夏のファンクラブといったところかしら。」

それはとことん海好きやろうのクラブなのだろうか？

いや…まだそれであつてほしいんだけど。

「生徒会ではクラブの仕分けとかやってるんですか？」

「一応やってるんだけど、年に1回しか行えないし、苦情が来えないと審査できないのよ。」

「そうか…まずはストーキング犯を見つけないと。」

「そうね…まあ、わたしに任せなさい！」

「ほえ？なにか秘策でも？」

「まあ、いろいろ考えておくわ。」

そして病院にて、僕たちはそれぞれの場所へ帰っていった。

「おはよう、晃弘。」

「ああ、おはよう…。」

週明けの月曜日、晃弘は浮かない顔をしていた。

ていうか僕も浮かない気分だ。

「明後日、テストなんだよな…。」

ここ最近、部活が無かったのもそのせい。

僕は療養中に、少し勉強した程度なので、ほんとに勉強しないとまずいと思っている。

「なあ、風巻は英語得意なんだっけ？」

僕は英語と音楽が得意なのだが、この写真やろうは本物のバカだ。

ただどあいっ、美術だといつも100点取ってた覚えが…

「うん。どうかした？」

「この受け身の問題なんだけど。」

問) 次の文と同じ意味の英文を()の部分の主語として答えなさい。

M a n a k a i s l o v e d b y (m e) .

「過去分詞とか分かりにくいんだよ…。」

僕は英語、音楽しかとりえが無いので、ここはきっちり答えとかないと。

「これは、『I l o v e M a n a k a .』が正解だと思う。」

…あれ？

ガラガラ！

「そうかそうか、きさまがわれらの諸悪の根源か。」

さっそうとマントをはおった怪しい集団5、6人が教室にやってきた。

「だれだおまえら！」

晃弘がのせられてる、めんどうなこつた。

「我らは“Love Summer club”もとい河本真夏大
好きクラブだ！」

これがあの非公認クラブ！？ていうか完全にストーカーだ！

「あなたたちストーカークラブが、僕らになにか用ですか！？」

「ストーカー言うなコラ。」

はう！また思ったことが口に出ちゃった！昔からの悪い癖なんだよな…。

「きさまがさっき言ったことを聞きつけ、調教しに来たわけだ。」

「さっき言ったこと…あ！晃弘なんてことしてくれたんだ！」

「俺のせいにするな！そもそもこの問題が悪い！」

ちくしょう…僕は文部科学省に文句を言える立場はないというのに！

「さあ、というわけで我が部室に来てもらおう。」

「え！いやだよ！晃弘を連れて行って！」

「なんでだ！用があつたのはきさまのほうだろ！」

「2人ともきやがれ、晃弘とやらは口封じだ。」

「ぐっ…」

「晃弘！僕を睨まない！僕のせいじゃないからねこれ！」

こうして僕らは見事に縛られ、連行されてしまった。

このストーカー…邪悪なオーラをものすごく感じる…。

「…ボソボソ。」

ん？なにかつぶやいてる。

「…ぜったいに卑猥な目にあわせてやる…」

だれか助けて。

1 - 1 1 やってきた刺客（後書き）

時間が無いので今日は短めです。

それにしても奈於ちゃんとはほんとに女子扱いですね。

自分でキャラ絵作ったけど、かなりの美少女になっちゃったことについては別の話だ。

1 - 12 松葉杖はある意味凶器だ（前書き）

「あれ？ここは？」

「迷いましたね…。」

「ん？あなたたちは誰でしょう？」

「はい？あ、誰かと思えば女の子か…。」

「だれかガスバーナー持ってきてください。」

「はやまるな！おれは天音龍也だ。」

「妹の、天音夢羽です。」

「あれ？たくみさんとこの…。」

「そうなの。どうやらここに迷い込んでしまつて。」

「…あなたたちはどんな世界をうろついているんですか。」

「それがたくみんのやつ、教えてくれなくてさ。」

「…はあ。」

「そんなことより君みたいなかawaii女の子が、どうしてここに？」

「…お義兄さん？かわいいだなんて…。」

「僕は女の子じゃないんですよ…？」

そんなつもりはなかつたんだ。

1 - 12 松葉杖はある意味凶器だ

「いまからこの腐女子に制裁を加える。」

「女子じゃない！僕は男だ！」

もうだれも僕を男として見てくれないよ…おちこんできた。

「風巻奈於、真夏に対して愛の言葉を公言したために、不純同性愛として重刑の処す。」

「まって！どこにもレズ要素入ってないんだけど！？」

「きさまが男子でなかったことを幸福に思え、異性愛だったら死刑だったのだからな。」

命は助かったけど社会的に殺された気がする。

「ん…処刑方法ねえ。」

もう命の保障もなさそうだ。

ていうか晃弘はなにをしている？

僕と同じところにいるけど、声も聞こえないなんて…

「……！（んぐー！）……！（んぐー！）」 手足口も縛られる

ごめんね。僕よりもひどい目にあつてたんだね。

「…決めた。」

「はい？」

「きさまの上半身裸を学校新聞にて掲載する刑を行使する！」

こいつ完全に僕を社会的に抹殺する気だ！

「だれかー！！」

バン！

鉄の扉が思い切り開かれたのは叫んだ直後であつた。

「奈於ちゃんをいじめるのはやめなさい！」

「だれだおまえは！」

そこには松葉杖を両脇にかかえた…

「わたしは光鳴湾中学校前期生徒会会長兼公式活動団体審議委員会

生徒代表、樹雨漣よ！」

漣だって！ていうか自己紹介長い！

「なに！我らを否定する卑劣な悪党か！」

「卑劣なのはあんたたちのほうよ！真夏ちゃんに手をだすに限らず、奈於ちゃんにまで手をかけるなんて！」

「うるさい！こいつが真夏を愛してるって言ったんだ！」

「それはわたしが遠まわしに言わせたのよ！」

「「へ？」」

「漣、どういうことなの？」

「晃弘くんが見せた問題は、わたしのお手製なの。真夏への愛を公言してしまえば、

ストーキング犯も黙っちゃおけないだろうからね。こういう人はマヌケだから。」

「くそ、我々をのせておいて、侮辱までするとは…。」

「さあ、みんなを解放しなさい！」

「ふふふ、さあ今までのおまえならあきらめるところだったけど…」

そうだ！漣は昨日退院したばかりだ。これならやられたいほうだいでは…？

「まずはその腐女子をぶっ殺す！」

「つてええ！結局僕は死ぬ運命に！？」

ドゴッ

松葉杖がストーキング犯の腹に突き刺さった。

「…んなっ！」

「奈於ちゃん！その松葉杖を渡して！」

「う、うん。」

「くおおお！部長のかたき！」

遷に松葉杖を投げると、華麗にキャッチし、剣のごとく操り相手に立ち向かった。

「はぁ！」

片方の松葉杖だけを軸にし、すきも見せずに蹴りをもかましていく。

ていうか…強い。

「奈於ちゃん！ボクのところまではやく逃げて！」

「って樫沢さん、なんでここに？」

「零ちゃんのお手伝いだよ。今のうちに！」

「させるかー！」

くそ！一人隠れてたな！

シュッ！

「ぐお・・・」

樫沢さんは延髄チヨップで相手を抹殺した。

ていうか、この学校の女子はバケモノか…

湊は部員を全員ボコボコにして、晃弘を連れて戻ってきた。

「あー、せいせいした」

「で、あのクラブどうするの？」

「部員全員処刑で、クラブは解散ね。」

その処刑は、きっとあいつらが僕にやろうとしてたことより恐ろしいと思う。

「あ、ありがとう……いろいろ。」

「いいの。それにセクハラなんて犯罪よ、かわいい女の子にむかって……」

「……………！？」

「あれ？どうかした？」

「さらばだ！」

「え？まって奈於ちゃん！」

「奈於ちゃん！」

「……ん？風巻？」

「すみません、精神的疲労がとんでもないことになってるのでどうか休ませてください。」

「は、はあ…ベッド使っていいからね？」

保健室、どうかここが安息の地となってくれ・・・！

「じゃあ、名簿に〇うつてから休んでね。」

「あ、はい。」

えーと、僕の名前はと…

150

[illegible]

1 - 1 2 松葉杖はある意味凶器だ（後書き）

ははは、もう保健室でも男子として扱われてねえ
天音兄妹はいつ出番が来るんだろう？

1 - 13 弾けとんだペーパー（前書き）

「……うつだ。」

「ねえ、奈於ちゃん？なににおちこんでんの？」

「栞沢さん、僕は男の子だよね？」

「奈於ちゃんはみんなのアイドルだからね。」

「なんで言葉を濁すの！？」

「……でも奈於ちゃん、男らしいシーンに出くわしたことってあるの？」

「……ない。被害者役がおおい。」

「ボクも男の子扱いされている気がするんだ。」

「……そうか。」

「……そうだよね。」

なんだろう？死の予感がする。

1 - 13 弾けとんだペーパー

なんとか姉のおかげで目を覚ますことのできた僕は、期末試験に臨んだ。

それでも僕は受験生なのだから、成績はとっておきたいのが現実だ。でもスポーツ推薦の話もきているので、どうなるかは微妙なところだ。

…それにしても。

「国語だめだなあ…。」

テストが返ってきたのは、週明けの月曜日だった。

「よし、一気に返すぞー。」

こんなに採点早いのですごいことなんじゃないかと思う。

風巻奈於

国語	23点	音楽	97点
数学	62点	美術	86点
社会	78点	保体	64点
理科	59点	技家	56点
英語	98点	総合	623点

振れ幅でかすぎ…むしろ100点取りたかった。

僕が最も苦手なのは国語だ。

古典と漢字しかとれない、なぜか現代国語がなにひとつ分からない重傷者なのだ。

ちなみにこの学校の一番難しい教科は英語と技術家庭科だ。

とくに技術家庭科にはだれもが苦しむ。まあ例外が身近にいるんだけど…。

「晃弘ー、どうだった？」

「はっはっは、残念だったな風巻。」

「ん？なにかあったのか？」

「ふふふ…それがな、貴様に2教科も勝った気がするのさ！」

「さあ、マッチ棒になりたいならついておいで。」

「うるさい！これを見ろ！」

水野晃弘

英語	理科	社会	数学	国語		
8点	43点	45点	13点	24点		
					音楽	31点
					美術	100点
					保体	12点
					技家	4点
					総合	280点

「なに！」

美術で負けるのはいつものこと、仕方ない。

けどこのバカに国語で負けるなんて…。

「あれ？まさか本当に…」

「おお、そうとう奈於くんはまいったご様子で。」

「国語は今回難しかったよね。」

「うう…そういう2人はけっこういいんでしょう？」

「ん？まあよかったかな。」

「ボクは悔しかったけどね。」

海野原慎也

英語	理科	社会	数学	国語	音楽	美術	保体	技家	総合
96点	100点	92点	97点	91点	95点	89点	98点	96点	854点

僕の意識はふつとびそうだった。

英語	理科	社会	数学	国語
91点	87点	99点	91点	97点

椀沢椀

総合	技家	保体	美術	音楽
846点	93点	98点	94点	96点

1 - 13 弾けとんだペーパー（後書き）

時間がないので今日は切り上げ。
（8月23日）
明日は続きを書いていきます

1 - 14 リレーメンバー（前書き）

「…本格的に死にたい。」

「ははは。たくみんさんに愛の告白を喰らったから？」

「…僕はどうしたら幸せになれる？」

「今一番幸せだと思うよ。ボクや澪ちゃん、晃弘くんに慎也くん、翔くんに莢香ちゃんに愛されてるんだから。みんな味方だよ。だから胸張って生きてこ。」

「…うん、ありがとう。」

「そんな奈於ちゃんに朗報があるんだけど…。」

「ん？」

「実はさくたんが、たくみんさんに奈於ちゃんの…こによこによ。」

「きやああああ！」 ばたん！

「…気絶しちゃったよ。」

1-14 リレーメンバー

「えー、それでは400メートルメドレーリレーのメンバーについてだが…。」

テストが終わって採点が気になる日曜日、久しぶりの部活で

將軍の口からはリレーメンバーの話が語られた。

「樹雨漣は不慮の事故によりマネージャーに転向、かわりに河本真夏が入部したことは

みんな知ってることだとは思いますが…。」

それは部長の天川勇人が部員全員に連絡を回したので重々承知のはずだ。

さすがに漣は自転車でこけたということはプライドが傷つくらしく、

不慮の事故ってことを要因にしたつばいけど…

「本来なら今までの評価、タイムから選手を選出することになっているが、

部員の入れ替えが激しいので、1週間後、タイム測定を行うことにした。」

ざわざわ…となったが、このことも企画部が手をまわしたことだ。

さすがに他の部員にはだまっておくことにした。

このような手の込んだことをしたのは、真夏がリレーメンバーに選ばれるようにするため。

かなりのブランクがある彼女にとって、時間稼ぎをしたかったのだ。

もちろん僕らの目標は…

「みんな、選手となって全国に行くことを目標とし、必死に泳ぎに取り組むように。」

真夏といっしょに、全国へ行くことだ。

「真夏は背泳ぎをやるんだよね？」

「…うん。これからがんばる。」

「真夏ちゃん！がんばって。」

「零はのんきだな……。」

「……でも彼女は泳げない。泳ぎたくても……。」

実際どうなんだろう？はじめは僕とわざわざ同じ部活になるために転部してきたと

思ったんだけど、泳ぎたいとか……そんなことは悩んだりしないのかな？

「あ、將軍来た。今日のメニューはきつそうだな……。」

「がんばろうね奈於。」

不思議と、真夏は明るさを少しとりもどしてる風に思えた。

「今日泳いでみて、どうだった？」

久しぶりに2人で道を歩いたと思う。小学校以来かな？

「まだもうちょっと慣れるのには時間がかかると思うけど…なんとかなるかな。」

「…僕たち、メンバーにはいれるといいね。」

「そうだね。」

僕たちは互いに大切なものを失った同士だ、それでも青空のしたで笑い合っている。

まだ過去の決別はできていないけれど、こうしていると幸せ者なんだなと思う。

「それじゃ、明日もがんばろうね。」

「うん。じゃあね。」

真夏と交差点で別れ、しばらく歩いていると、

「まって〜。」

松葉杖をかたかたと鳴らしながら、漣がやってきた。

「ちょっと、危ないよ。」

「平気、もう慣れたし、そろそろこれともおさらばよ。」

たしかにこの前は松葉杖で敵を倒したけれど…

「それよりも真夏ちゃんと2人で帰っちゃうなんて〜。」

「どうかしましたか?」

「いや、ちょっと妬いちゃった。」

「別に毎日いっしょに帰ってないでしょう。」

「うそうそ。真夏ちゃん、君といると幸せそうなんだもん。」

「へ?」

「ありがとう。奈於ちゃん。」

いったいどういうことがよく分からなかったけど、

あまり詮索はしなくなかった。

そのあとテストの話などいろいろな話をして、家へと向かった。

家へは一本の大きな坂を上っていく、学校へ行く時には下っていくんだけど…

そこは春になると桜並木となつてとてもきれいな道で有名なんだけど、

引きこもつてた僕はすっかりそんなことを忘れてた。

大きいマンション前の交差点、そこが別れの道だった。

「じゃあね。奈於ちゃん。」

「さようなら。」

「ただいま。」

「おかえり奈於ちゃん。そういえば慎也くんからお届けものが来ましたよ。」

「え？」

すこし大きめのダンボールが、くすんだフローリングの上におかれていた。

えー、どれどれ

差出人 海野原慎也

風巻茜様

風巻奈於様

「って姉さんも入ってるよ。」

「あれ？ほんとだわ。」

「とりあえずあけてみようよ。」

ぴりりっ

あれ、手紙と…寝袋？なにこれ？

「とりあえず…姉さんこれ…」

「なにかしらね？開けてみるわ。」

いそいそと姉さんは中のものをとりだしている。僕は手紙を見た。

風巻茜、奈於さまへ

なにかとお世話になっております。

奈於くんはお元気でしょうか。

実は僕も風邪をこしらえてしまいました。体調管理は気をつけましようね。

なんとか奈於くんのフィギュアに癒されながら、

徐々に回復しています。明日は学校来れそうです。

「まてまてまて！僕のフィギュア！？」

そういえば前に作ってって言ってなかったっけ？あれは本気だったのか！？

さて本題です。今回僕の友人に頼んで茜さんへの帰国祝いの品を送ることにしました。

抱き枕ではありますが、喜んでもらえれば幸いです。またどこかで僕をお見かけするようなことがあれば、

声をかけてください。いろいろお話したいです。
それでは、突然のお手紙、申し訳ありませんでした。

「あら！奈於ちゃんの抱き枕！かわいい〜。」

その晩、僕は猛烈に落ち込んで料理などできなくなった。

1 - 14 リレーメンバー（後書き）

13話の前日のお話でした。

抱き枕は定番もの。あとは…メイド服？

きるタイミングあるのか？この小説に？

第2期ならできるかも

企画部案 最終雑談宣告

「第一回、小説方針新興会の開催〜。」

「って淺。企画部全員で集まってなにを…」

「これからのこの小説の進行方針を新興するために、今日は集まってもらったの。」

「さりげなくしゃれていたけど、これはおもしろそうだね。」

「って慎也？これのどこにおもしろみがあるの？」

「要するに、さくたんを裁く会でもあるわけだ。」

「ああ、なるほど。」

「本日はスペシャルゲストに、椛ちゃんにも参加してもらってるわ。」

「ボクだよ〜。よろしくね。」

「さて、翔くん。例の発表を。」

「ああ、ついにオレにも出番が来たか。」

「いいからさっさと始めてよ。」

「わかった。さて、みんな、この小説に旧作があったのは知ってるな？」

「もちろんですよ。風巻先輩が男の子だったときですよね？」

「莢香？僕はまだ男だよ？」

「なぜこれは改稿されたのか？さくたんの意図とはなんだったのか？」

「それは風巻を女子にしたかったからだろ？」

「晃弘。あとで倉庫に行こう。」

「半分あつてるが、本来はこれは学校に提出するものだったんだ。」

「要するに自由研究なのよ。」

「でもな…さくたんは…他の宿題に全く手をつけず、塾へ行きっぱだつたりネットサーフィンしてたりと、バカやってたりしてたわけだ。」

「つまりは…？」

「つまりはこのままのペースでは間に合わないことになる。」

「Bノートも2日で3分の2やってたな…提出日ぎりぎりです。」

「だから明日から…一気に2、3話ずつ投稿されることになる!」

「ええ!？」

「これはかなりハイペースだね。」

「なので読者のみなさんは、新鮮なおはなしをたくさん見れることになる。」

「PVも多分あがりますよね？」

「そうかもな。まあ今までさばってた罰だな。」

「ふーん…なるほどね。話はそれだけかな？」

「いや、あと一つある、それについては莢香と椋が発表してくれる。とりあえずオレさまの出番は終わりだ。」

「はいはい、坂本先輩にかわって莢香と、」

「椋だよ。」

「あたしたちからはですね、写真のおはなしです。」

「え？それは俺の写真か？」

「いや、君のはちょっと投稿きついな…ちがつよ、ある写真を、ボクたちが公表してもよいとさくたんが言ったから、その話だよ。」

「写真って…どんな？」

「実は……“風巻奈於の浴衣絵写真”なのですよー！」

「なんてことしてくれたんださくたん！？」

「さくたんのブログ、“作者のもろこし畑 作：作者”にて、明日の21：00から3日間

期間限定公開します！絵は下手ですが、かなりの美少女ですよ！」

「さくたんのマイページからサイトへは移動できます。感想あればコメントも

よろしくお願いします。」

「いじょうです。」

「ありがとうね莢香ちゃん、椀ちゃん、そんなわけで、これからこの小説を

よろしくお願いしますね。」

「もう嫌だ…」

1 - 15 企画部の集会（前書き）

「樹雨漣です！実は前書き初登場です！よろしくね
さて、今日21:00にさくたんのブログにて、
奈於ちゃんの写真が3日間限定で公開されます！
さくたんのマイページより“作者のもろこし畑 作：作者
です！みんなよろしくね。”

「僕はどうしたらいいんだろう…。」

1 - 15 企画部の集会

「ふああ、おはよう姉さん。」

「おはよう奈於ちゃん。」

今日は水曜日か…最近時は過ぎるのが早いと感じる。

楽しい時間ほど短く感じるものだけど、最近学校が楽しくなっていてる気がする。

真夏も日を増すことに速く泳げるようになってきたし、順調だ。

僕は姉さんと朝食を作り、とそうでもしないと大変なものが出来上がるから…

材料・味付けは僕が用意し、姉さんは調理担当とすれば、見た目も味も完璧なものとなる。

これを姉弟愛といったやつは満身創痍にしてやりたい。

「そういえば…私は今日出張に行ってきます。」

「出張？今どつか勤めていたっけ？」

「違うわ。某テレビ局ののどじまん大会に出るために東北へ行つて

きます。

帰ってくるのは明日の夜中になりそうね。」

「のどじまん…日曜日の放送だよね？」

「ちがうわ、特番よ、今日の夜に生放送の番組。」

「ああ、あれか。って姉さんいつのまにエントリーを!？」

「まあ見ててね。精一杯歌ってくるから。」

「わかった。がんばってね。」

「うん。お留守番よろしくね。」

「はいはい。」

「おはよー。」

「おはよう晃弘。」

今日も写真を眺めている変態は、密売の成果を報告した。

「真夏ちゃんが出したとたん売れ筋大幅アップだね。すごい数売れたよ。」

「ていうか儲けはどうしてんの？」

「一部は機材、あとは貯金だ。俺はプロの写真家になりたいからな。」

ふざけているような商売だけど、売り上げを夢のためにためている、晃弘はやっぱり芯はまじめなんだな…。」

「ちなみに真夏は売り上げ第4位だ。」

「へ？トップ3は？」

「3位は椛だ。女子からの売り上げが多い。2位は生徒会長さま。1位は…ダントツでおまえだ。」

みんな、頭おかしいよ？

「ん？今ボクの名前を呼んだかい？」

「椛か。写真の話だ。」

ちなみにこの写真屋は椛沢さんも知っている。でもお得意さま限定
と言っていたけど、

生徒全員この存在を知っているんじゃないか…？

教師も気付いていないとか、かなりの鈍感か？だと思う。

「やっぱり奈於ちゃんのは売れるんだね。美少女っていいよね。」

「僕が美少女っていうのはおかしいし、椛沢さんのほうが美少女だよ。」

「あはは。なかなか言うね。」

正論を述べただけだと思うけど…。

「今の台詞、会長が聞いたらどんな反応するんだろう…」

へっどついつつと？

今日は職員会なので部活は自主練なんだけど、

企画部に真夏、栲沢さんもなぜか来て、緊急集会を行った。

「はじめに、栲ちゃんにも企画部に入ってもらったことになりましたー！」

「よろしくね。」

というか前からいてもおかしくはなかったと思うけど。

「さて、水泳部はみんなリレーメンバー目指してがんばっているけど…」

400メートルメドレーリレーは、バタフライ 背泳ぎ 平泳ぎ
クロールという順番で、

種目に1人、100メートルずつ泳ぐというルールだ。

バタフライは、部長の天川勇人くんが1番候補だ。

僕はクロールが最速記録なので、よほどのことがない限り選ばれないことはないと思う。

背泳ぎは真夏に何とか入らせたい。割とこの泳法は苦手としている人が多いので、

なんとかなるかもしれない。

問題は平泳ぎだ。実は晃弘よりも速い人が何人もいる。所詮は僅差なのだが、

落ちることはおおいにある。

「理想は、部長 真夏 晃弘 奈於 という順番なんだけど…」

「晃弘の泳ぎをビデオに撮ったものを見たが、無駄に手に力が入りすぎています」

オレは思う。抵抗が結局大きくなるから、足のほうに馬力をかけたほうが

いいと思うのだが。」

「あと最近、みんなのタイムがおちてきます。そこをねらい目として、

これからがんばってみてはとあたしは思います。」

「あと真夏の状態について教えてくれ。」

「タイムは25メートル背泳ぎは17秒だったよね。」

「17秒!?まさか短期間でここまで上げれるとは…。」

「今も上がりつづけてるんですね?」

「…うん。」

「このままのペースでいくと…13秒、おそらくはいけるだろうな。」

「がんばってくださいね。河本先輩!」

「オレも応援してるから。」

「…みんな、ありがとう。」

「さて、これで確認はとれたわね、あとは個人のがんばり次第、話はそれからよ。」

「うん。がんばっていこう。」

「ああ、にしても腹減ったよ…。」

「そういえばさ、みんなごはんって自分で作ってたりするのかな?」

「そうして、集会は雑談へと成り果てた。」

「わたしは一人暮らしだから、料理は自分で作ってるわ。」

「え？ 溲って一人暮らしなんだ。」

「うん。腕には自身があるの。」

「ボクもけっこう作ってるんだ。なにかと作れると便利でしょ？」

「でも莢香のクッキーは、ほんとに上手かったぞ。」

「ああ！ 僕も一回だけ食べたことあるけど、ほんとにおいしかったよね！」

「風巻先輩、ありがとうございます。また焼いてきますね。」

ほんと優しい…。人は莢香を見習うべきだ。

「そつえば、風巻って姉さんが今いるんだろ？」

「うん、でも今日は出張でいないんだ。」

「出張？…まあいいや。料理は作るのか？」

「うん、まあ上手くはないけど…」

「え！？ 奈於ちゃんの料理食べてみたい！」

いきなり溲が食いついてきた…嫌な予感。

「奈於ちゃんの料理か…。ボクも食べてみたいな。」

「奈於くん、今日姉さんいないのなら、振る舞ってもいいんじゃないな

いかな？」

「あたしもたべたい。」

「奈於の料理か…お手並み拝見だな。」

このナルシストは料理できるのか？

「ねえ！今日は奈於ちゃん家に泊まってもいい？」

たしかに一応一軒家なので、泊まれることは泊まれるんだけど…

料理は、アレを振る舞うしかないのかな…。

1 - 1 5 企画部の集会（後書き）

さあ、強化週間1日目！
果たして更新できるかなあ？
不安だらけだ

1 - 1 6 振る舞われたもの（前書き）

前回のあらすじ

奈於ちゃんの絵が公開中だとさ

1 - 16 振る舞われたもの

結局企画部全員で僕の家に行くことになった。

集会が終わった後、アレに必要な食材を買って、7時に僕らは集まった。

ピンポン

「失礼するわね。」

「やあ、奈於くん。」

「ほんとにあがらせてもらうとは、悪いな。」

「いいよ。一人だし。どんどん入って。」

「「「おじゃましまーす」「」「」

「んで風巻。何を作るんだ？」

「とりにくを使ったものだよ。」

「へえ、実はボクも食材を買ってきたんだ。ボクも作ってもいいかな？」

「栴沢さんも？いいよ。」

まさか栴沢さんも作ってくれるなんて、気がきくなあ。

「奈於くん、僕も手伝ってもらってもいいかな？」

「慎也も？いいよ。もしよかったら冷蔵庫の中も使ってもいいよ。」

「慎也くんもか…やっぱりこのときが来たのね。」

「ふっ…おまえには負けたくないからな…。」

なにが始まるんだ。

「できたぜ…」

「ふう…久しぶりに本気を出したわ…。」

鉄人料理対決なみの熱いバトルを繰り広げた彼らをよそに、僕は淡々とアレを揚げていった。

「僕は海老のアボカドサラダ。」

「ボクはかぼちゃの煮つけだ…。」

なにげにいい前菜だと思う。

「どっちもおいしそうです。」

「じゃあ奈於ちゃんに悪いけど、先にいただきちゃいましょう。」

「」「いただきまーす。」「」

みんなは先に食べ始めたか…早く作っちゃおう。

「じゃああたしはかぼちゃいただきまーす。」

「どれもおいしそうだな。」

「あ！このサラダすごいおいしい！タルタルソースってまさか自家製…？」

「まあこれくらいしかできなかったから。」

「椀のかぼちゃも甘くて最高!」

「あはは。喜んでもらえてうれしいよ。」

そして僕も、仕上げにレモン果汁をかけて、調理を終わらせた。

「できたよ。手羽先の唐揚げたくさんあるからね。」

「これがメインディッシュか…!」

「輝いて見えます!色も綺麗ですね。」

「まさか奈於がここまでできるとは…。」

「まあ今日はけっこうまぐれなんだけどね。」

でも今回はけっこう力を注いだからね…。

「じゃあ改めて、いただきます。」

「「「いただきます。」」」

「奈於ちゃん…すごいわ。」

「なんだか自分のかぼちゃが空しく思えてきたよ…。」

「…おいしいわ。」

僕の唐揚げは、大好評だった。

「ははは。よかった。」

そういえば、今日の生放送に姉さんが出るんだっけ。

テレビをつけ、チャンネルを合わせた。すると…

『では次の挑戦者は、風巻茜さんです。』

ちょうど姉の番だった。

「うそ…茜さん、テレビに出てる…。」

「出張ってこのことだったのか…。」

『茜さん、今回の意気込みは？』

『はい、世界で一番愛してる弟さんのために、精一杯歌いたいです。』

いきなり問題発言だと思う。

『弟さんですか。ちなみに弟さんはここに?』

『いいえ。家で見ていてくれます。早く帰ってあげてちゅーしてあげたいです。』

「風巻。こんな夜中に外出たら、補導されるぞ。」

「放して!この姉を今すぐ殴りに行かないと!」

羽交い絞めにされて動けない…帰ってきたら撲殺だ!

『それでは、曲目を。』

『オペラ座の怪人より“シング・オブ・ミー”で。』

「え!?あれってオペラだよ!?」

「そんなにすごいのか?」

会場も一気にどよめいた。今まで普通にJ・POPだったのに、急にオペラになるなんて、

けれどもそのどよめきは、一気に興奮と喚起に変わった。

クリスチーヌが音楽の天使より授けられた歌声が、

今姉の口から響いているようだった。

その歌声は人々を癒し、心のなかを綺麗にしてくれるようだった。

その圧倒的実力差で、姉は見事に優勝し、

賞金200万円入ったと聞くまで、僕らは終始啞然としていた。

1 - 1 6 振る舞われたもの（後書き）

なんとかのせれました。

では僕は宿題と戦っていきます！

1 - 17 とびだせ新聞記者（前書き）

「あ、ど、どうもこんにちは！」

「ん？あなたはだれかな？」

「たくみさんの『無の片鱗』でお世話になってる
ナワエ・ミウリュです。」

きよ、今日は本物の奈於さんを見に来て……」

「あー、ボクは榎沢榎なんだけど、奈於ちゃんね、今うつなんだ。」

「そ…そうですか…す、すみません、おじゃまして……」

「あはは、かわいいね。でも奈於ちゃんに興味あるんだ……。」

「ち、違うんです！でも…わたしより…か、かわいいですよね……。」

「君を越すかわいさなんだ…すごいレベルだね……」

たぶんみなさんが思っている以上に榎さんもかわいいと思う

「ただいま。」

「お…おかえり、姉さん…。」

翌日、姉さんは晴れ晴れした表情で帰ってきた。

「おめでとう…すごかったよ。」

「奈於ちゃんのことを思って一生懸命歌ったわ。」

新聞のエンタメ記事には、姉さんの脅威の歌唱力について堂々掲載されていた。

「200万円はどうするの?」

「そうね…今度ごはんでも食べに行かない?」

「うん、そうだね。」

姉が活躍してくれると、なんだか僕もうれしくなった。

姉さんとの生活も、いっしょに料理を作るのと、多少卑猥なことをされるのを除けば

楽しいものだ。

1人は寂しい、だからこの生活がこれからもずっと続けられますように…

「おはよう。」

「あ、ああおはよう。」

「?どうした晃弘？」

あの日以来、僕が教室にくるとどよめかれる。きっと姉さんのことだと思っただけ、

別に僕あまり関係ないのに…

「おはよう奈於ちゃん。お姉さんは帰ってきた？」

「うん。すごいうれしそうだったよ。」

唯一栞沢さんはいつもと変わらぬ態度でいた。

「奈於くんおはよ。今日も暑いよね。」

慎也も…うう、君たち優しい！

「そついえば晃弘。真夏との自主練はどう？」

リレーメンバーになれるか危うい2人を夜に室内プールで泳がせている。

澪もついていったと思う。

「けっこう順調。真夏も速くなってきてるし、いけるかもな。」

「そう、よかった。」

「明後日の日曜日だよな？」

「うん、がんばろうね。」

部活も無事に終わらせ、帰ってみるとなんだか人だかりができていた。

…僕の家の前で。

「なんの騒ぎだろう?」

テレビカメラにマイクを持った人…どうやらマスコミのようだけど。

「これは家に入れそうにないな…。」

裏口から行くか…と、ささっと裏へ回ろうとした…

「あの、すみません。風巻茜さんのお知り合いですか?」

新聞記者っぽい女の人と話しかけてきた。どうやら姉弟だと気付いてはいらしい。

「お知り合いですけど、なんですか?」

嘘はつきたくなかったので、一応知り合いということ。

「茜さんはふだんどういった人なんですか?」

ここで変態だとはいえないし、いいイメージの返答を試みよう。

「綺麗な方ですね。学生に見えちゃうほど若いし、憧れます。」

「そうですか、実は昨日茜さんマスコミに囲まれて動けなくなった際に、

瞬時にカメラ壊して優雅に去っていったんですよ。」

なんてこった。

「なにしてんの姉さん!？」

「え?お姉さん?」

あ、まずい。

「さよなら!」

「あ、まってください!あなたは茜さんの…」

出来ることならこの記者の記憶をぶっとばしたかった。

「ただいま…」

「あら、おかえり、大変だったね。」

「見てたんだ…。」

「姉さんを綺麗だなんて…照れちゃうわ。」

お世辞だとはとても言えない。実質綺麗だし。

「カメラ壊したの…？」

「違うわよ、あまりの人の多さに壊れちゃっただけよ。」

姉さんほどの能力なら、簡単そうだけど…

でももっと深刻な問題が生じてしまった。

「僕が弟だつてばれちゃったよ…。」

「別になにもおきないと思うわ、それにばれてないと思う。」

「え？どういうこと？」

「まあ明日分かるわ。」

次の日の新聞。

『美声の天使の弟は妹だった!?』

おかしいと思う。

1 - 17 とびだせ新聞記者（後書き）

新聞ネタね…射命ま（ry
がんばって夜にまた更新しますね。

1 - 18 メンバー選考

運命の日曜日、プールは闘気で満ち溢れていた。

『いよいよだね…』

『平泳ぎ…入ってみせる。』

『俺は神だ！崇めるがいい！』

『ああ、この写真可愛い…』

この部活はいろんな意味でおかしいと思う。

「では諸君。早速400メートルリレー選手選択審議会（つまりタイムが速い選手選べばか！）を始めようと思う。」

（）はほんとに必要なのかな…

「風巻、なにか文句でもあるかね？」

「めっそもございせん。」

どうして將軍は僕の心の中を読み取れるんだろう？

ちなみに400メートルリレー選手選択つまりタイ審議会は、自分が選択した泳法を

100メートルを競泳し、いちばんの選手がはれてメンバーになれる。

バタフライは2人候補、背泳ぎは2人候補、平泳ぎは4人候補、

クロールはなぜ僕だけだったので、僕はもうメンバーになった。

まずはバタフライ、天川勇人と桐生通雄だ。

まあ…勝敗は目に見えてるんだけどね。

「よい」　パン！

「まさか通雄、自爆行為か？」

通雄はバタフライがいちばん得意と言っていたけど、部長のバタフライは

すべからず速い。市内でも入賞しまくっている。

まあ、勝てるわけないよね…。

「勝者、天川勇人。」

これで次は背泳ぎだ。真夏と、原田麻紀。原田さんは背泳ぎで最も速い人だ。

今の真夏だとどうなるかな…

「よいい」パン！

麻紀さんはスタート直後、バサロで差をつけた。多くの選手はこのバサロを使う。

だけどね…真夏にそんなものはいらない。

「え？追いついてる？」

真夏の特徴であるフォームと抵抗の少なさは、この1週間で大きく成長した。

まだバサロはできないけど、充分に戦力になる！

ターンのたびにバサロで差をつけられるが、すぐに追いつき、

またバサロ…でも勝利は近かった。

最終ターン、真夏のスピードは原田さんのバサロを越していた。

「勝者、河本真夏。」

皆は驚いていた。たった1週間でリレーに出られるものではない。

けれど彼女は成し遂げた。並ではない努力だったと思う、それでも、

「泳ぎたい」の一心でここまで来れたんだ。すごい。

「やったね真夏！」

「うん。みんなのおかげだよ、ありがとう。」

真夏はこれ以上ない笑顔を見せてくれた。

「それでは平泳ぎの測定を始める。」

残りは平泳ぎだ…晃弘、がんばってくれ！

「1番、金井良助」

「よろしくお願いします。」

「2番、伊藤癒李」

「よろしくおねがいします！」

「3番、森川正人」

「ああ、はい、よろしくおねがいします。」

「4番、水野晃弘」

「よろしくお願いします！」

「それでは、位置につけ。」

いよいよ勝負のとき、この日のための1週間はとくに大変だった。

僕は全国へ行きたい。それもいままで信頼を分かち合った仲間と。

そして、スタートの火蓋が切って落とされた。

「よい」パン！

1 - 1 8 メンバー選考（後書き）

まさかの打ち切りエンド…
時間がなかったからね。

1 - 19 変わり果てし関係（前書き）

先に行っておくと、かなり真剣です。

1 - 19 変わり果てし関係

『400メートルリレーメンバーとマネージャーは直ちに会議室に集合せよ。』

將軍からの召集、作戦会議と聞いたけど。

「それでは、全員集まったな。メンバーの確認をしよう。
まず、マネージャーの樹雨澪。」

「はい。」

「クロール代表、風巻奈於。」

「はい。」

「バタフライ代表、天川勇人。」

「はい。」

「背泳ぎ代表、河本真夏。」

「…はい。」

「そして平泳ぎ代表…金井良助。」

「はい。」

ほんとうに接戦だった、けれどコンマ2秒及ばなかった…。

「いいか、諸君は学校の代表として出陣することになる。メンバーに選ばれなかった

人、他の生徒の分までしっかりとやることだ。
それではミーティングをはじめよう。」

晃弘はほんとうに落ち込んでいた。あれだけががんばったんだ、悔しいに決まってる。

だけど測定の翌日、ほんとうに驚いたことがあった。

「おー風巻おはよう。」

「え？お、おはよう。」

あれだけ落ち込んでいたのになかったことのように元気でびっくりした。

「ど、どうしたの？昨日は…」

「負けたもんはしょうがないじゃん？現実には逆らえないからさ。こうポジティブに生きていかないと死んでしまう！それに写真があるし…おまえのな。」

「晃弘、君への信頼が一気に崩れた気がしたよ。」

でも笑えなかった。どうもムリをしているような…

ちょこつと見苦しかった。

「晃弘くんのおかしい？」

家に帰った僕は、姉さんに相談した。

「なんか無駄に明るいつていうか…どうしても悔しさを表に出したくないって感じだった。」

「それは…まずいわ。」

「え？」

「自分の感情に正直にならずに逆らって、自分を追い詰めていると思う。」

きっと心からものを言えなくなる…人形のようになってしまっわ。

「

人形と聞いて肩が揺れた。僕もひきこもって人形のように動かなくなっただから。

「僕のように…なっちゃうのかな。」

「いや…なにことも本心をしゃべらなくなると思っわ。」

「それじゃあ晃弘は…」

「まだ大丈夫だろうけど…そうね。今度晃弘くんの家に行ってみましょう。」

「え？なんで？」

「なにかね…嫌な予感がするの。」

「ねえねえ晃弘。」

「ん？なんだ？」

「今度さ、泊めてくれない？」

「一瞬、晃弘の顔がこわばった…のは気のせいかな？」

「あー…今度聞いてみる。ところでなんでだ？」

「姉さんがまた出張だし、家に記者がたかられるのも困るし。」

「なるほど…わかった、聞いておく。」

「うん、よろしくね。」

翌日

「わるいな…母さんが風邪をこらしてな…泊めることは無理だな。」

「そう…ねえ。」

「ん？」

「もしかして、家でなにかあった？」

すると晃弘はたじろいた。なにか恐ろしいものを見たかというように。

「それはない…というかどうして？」

「いや…なんか浮かない顔してたから。」

「そ、そうか？すまんかった。」

「いいよ、悩みは誰にでもあるだろうし…あ、そういえば今日カウンセリングの日だった。」

「あれ？まだ行ってるのか？」

「もうしばらくね。」

僕は月に1回カウンセリングを受けている。まだ少し安定していないしね。

「分かった。將軍には俺が伝えとくな。」

「頼むね。」

やっぱり…なにかおかしいな。

晃弘が家のことであんな顔になるなんて、普通じゃない。

…なにか、気にかかったからか、僕の足は晃弘の家へと向かっていった。

カウンセリングの先生には、あとで電話で謝ろう。

晃弘の母さんにためと、プリンを買って、晃弘の家へと向かった。

どこにでもあるような普通の一軒家だ。

ピンポン

「すみません、風巻です。」

「風巻くん！？…今行くね！」

ガチャ

「すみません、突然のご訪問で。」

「久しぶりね、どうしたの？」

風邪なんてひいてないように見える…全然元気じゃないか！

晃弘は嘘をついていたのか！？

「すみません、お聞きしたいことがあります。」

「なに？」

「晃弘くんの、家での様子を教えてくださいませんか？」

「もしもし姉さん？」

「あ、奈於ちゃん。どうだった？」

「どうやら家でも様子がおかしいようなんだ。無駄に明るいて…。」

「そう…それじゃあ、いきましよう。公園で待ってるわ。」

「うん。すぐ行くね。」

ガチャ

午後6時半前、僕は公園に出会い、ある場所へ向かったのだった。

ピンポン

水野晃弘の家に。

「あれ？風巻くん…茜ちゃん？」

「すみません、上がらせて下さい。」

「え？」

「ごめんなさい。晃弘くんのお母さま。」

「ええ！？ちょ、ちょっと!？」

僕は急いで2階へと上がった。晃弘の部屋は…

「晃弘！」

ドアを開くと、そこは悲惨な状態だった。

破られたノート、カレンダー、紙くずが宙に舞っており、ところどころに

赤い斑点があつて…

まさか…血？

晃弘ははさみを逆手にもっていて、ところどころに切り傷があつた。

はさみには赤い液が滴り落ち、カーペットに染み付いている。

彼はうつろな表情を浮かべ、こちらを見た。

驚愕した、なんなんだこの顔は!?

絶望にまみれた、生きているとは思えない顔。これは晃弘なのか…?

「きゃあ! 晃弘くん!？」

「姉さん! 落ち着いて!」

「なにがおこって…!! 晃弘!? なにしてるの!」

「……なにつて、なにも」

「うそ…」

ドサッ

「お母さま!？」

あまりのショックに気絶してしまった。もうこれは地獄絵図だ…

すると、どたどたと足音が聞こえてきた。

「はあ…はあ…やっぱりそうだったのね。」

「え!?! 澪どうしてここに!?!」

「今はそんなことどうでもいいわ。それよりも奈於ちゃんは、救急車を呼んで。」

「はあ…どうしてあの子が…」

晃弘のお母さんは意識は戻ったけど、そつとう落ち込んでいた。

自分の息子が、あんなに豹変してしまったから。

「どうして遷は…晃弘の家に？」

「様子がおかしかったから、マネージャーの仕事として追ってみたの。」

まさかこんなことになってたなんて…。」

でも僕はもうひとつ気がかりなことがあった。

「いくら晃弘といえども、メンバーにはいれなかったくらいでこんなになるのかな？」

それは大げさだし、普通に落ち込むくらいだと思っけど…

「さあ、なにがあつたのかね…」

すると、1人の人影が見えた。あれは…

「真夏？」

でもなにか様子がおかしい。

もしかして、泣いている…？

「晃弘くん…どうして、約束が守れなかったからって…」

「真夏！約束ってなに？」

ハッとこちらを見た真夏は、とうとう泣き出してしまった。

「どうしたの！？」

すると、震える声で、こうつぶやいた。

「わたしね…晃弘くと付き合ってるの…。」

1 - 19 変わり果てし関係（後書き）

今日は文章長めのこの一話。
明日は3話載せたいです

1 - 20 これからが真の戦い（前書き）

前回のあらすじ

昨日たくみさんに奈於ちゃんの絵をあげた。

1 - 20 これからが真の戦い

「晃弘と…付き合ってるだつて？」

「…うん。」

談話室に移動した僕らは、真夏の話聞いた。

「実際はまだ付き合っていないんだけど…ある約束をしたんです。」

「約束？」

そつえば約束が守れなかったからとか…

「それはどんな約束なの？」

「俺らが全国へ行ったら、告白するつて。」

胸がズキツとした。彼はメンバーにも入れず、約束をこの段階で達

成できなかった。

それが苦しくってしょうがなくて…あんな真似を…。

「それじゃあ、晃弘は真夏が好きだったのかな。」

「でも気になることがあるの。」

「なに？姉さん？」

「どうして全国へ行かないと、告白をしないのかしら？」

「あ…確かに。」

「それは…」

「それは俺の両親が反対しているからだ。」

「晃弘！大丈夫？」

「ああ、もう平気だ。」

「晃弘くん…」

「俺の親は真夏と付き合うことに反対している。真夏は事情が分か

ってるだろ？」

「うん…わたし、うつにもなって、親もないから、信用できないって…」

すると晃弘のお母さんが、申し訳なさそうに口を開いた。

「ごめんね…私はほんとうは賛成してたの。だけど…お父さんがどうしてもだめだって…」

ついに暴力までもふるわれて…いっしょに反対するしか…なかったの…。」

「知ってた。痣があつたし、時折悲しそうな顔をしてたから、夜中におきてみたら…」

俺の父さんは暴君だ。普段は優しいが、気に入らないことがあると酒が入り、暴力を振るう。

でも翌日になると誠意をもって謝ってくれるからよかったんだが…今回は、きつそうだ。だから俺たちは全国に行つて、たくましくなつたら告白するって

言つてやった、すると渋りながらも、認めてくれた。」

「だから…あんな有様に…」

「くそ！俺は弱い！弱すぎる！いっしょに全国へ行こつて練習したのに、

こんな結果になるなんて！悔しい！悔しすぎる！」

ありつたけの感情を吐き出して、晃弘は呻いた。

運命に敗れ、もう道を閉ざされ、取り残された者のように、うずく

まるで…もう死ぬしか道が残されてないように…

まるで…もう死ぬしか道が残されてないように…

「よく本音を吐き出してくれたわね。」

姉さん…？

「晃弘くんはずっと本音を抑えていたから、自分自身が壊れてしまふところだったわ。」

私は奈於ちゃんを見てきたから、人の心の影がどんな影響を与えるか、よく知ってるの。

晃弘くんは、これから戦わなくちゃならないわ。あなたのお父さん。

自分が大会に出ることはもうできないけれど、晃弘くんのおかげで全国へ行つた！

と言われるようなサポートをすれば、十分に通用すると思つわ。」

失敗をし、堕ちた天使に光を差し伸べる女神のように、姉さんは優しかった。

「晃弘くん…これからよろしくね。」

「よかったわ…茜さんはすごいです。」

「晃弘くん、ごめんね。母さんも戦つわ。」

「晃弘、がんばっていいこうな！」

「みんな…ありがとう。」

晃弘から流れた一滴の涙は、とても輝いていた。

そうだ。これからが真の戦いなんだ。

僕らは、晃弘の分までがんばって、全国出場を果たすんだ。

1 - 20 これからが真の戦い（後書き）

さて、そろそろ終盤に入りますね。
今日はあと2話のせたいです。

1 - 2 1 囚われの七夕（前書き）

前回のあらすじ

奈於ちゃんの絵は、今日の21:00に消し飛びます。

1 - 2 1 囚われの七夕

事件があつたのは七夕の7月7日、来週の土曜日に大会に迎える、大事な1週間前だ。

昼休みに、坂本翔が慌ただしくやってきたのだ。

「おい！奈於！大変なことがおこつた！」

「ん？翔、どうかした？」

「晃弘と真夏が拉致された。」

「ええ！？」

たしかに今日は晃弘は来てない。熱が出たって聞いてたけど…

「どこにいる！？2人はどこに！？」

「今莢香と調査中だ。」

「くそ！」

「あ、どこに行く！？」

どうしてこんなときに限って！というか犯人は誰だろうか？

昇降口を飛び出して、校門をくぐった、すると…

「おまえが風巻奈於か。」

ロープを持った普通の男子生徒2人が立ちはだかった。

「なぜ飛び出してきたのかな？まあおおよそ察しはついてるがな…
くくく。」

「晃弘と真夏のことが。」

「はっ！そのとおりさ。案内してやるよ。ただし…眠らせてか（殴

「ふう、危なかった。」

「あれ？慎也？」

「きさまあ…おれたちのじゃまをしゃがつ（蹴

「まったく…勝手に飛び出したら怒られるよ？」

「栞沢さんも…。」

「そのナメクジさんたち、晃弘と真夏をどこにやった？」

「勝手に探しとけ…うぐっ！？」

「教えないと、ボクなにするかわからないよ？」

椋沢さん、笑顔でそう言つとすごい怖いよ？

「市営プールの…監視室…」

「ありがとう、それじゃ、おやすみ。」

「な… ドサッ

…おそろしいね。

「それじゃあ、行こうよ。」

「へ？う、うん、行こう。」

2人とも…無事であつてくれ！

バスに乗って市営プールまで来た僕らは、柵を乗り越えて監視室へ向かった。

ちなみに今日は水曜日の定休日なので、人はだれもいないはずだ。

「監視室はたしか室内プールの方だね。」

「正門はしまっているから、裏口のほうからいくしかないね。」

正門は鍵がかかっているから…あれ？」

「南京錠が、ついてない…？」

もしかして、と思い、ノブを回してみると、

ギイ…

「開いてる…。」

「行こう！奈於くん！」

「うん。」

と、廊下を疾駆していると、

「大勢でやってきてくれるなんて、うれしいねえ。」

と、かなりがたいのいい2人が行く手をさえぎった。

「あんたたち、なにもの？」

「雇われたんだよ。おまえらを排除するために。」

「雇い主はだれだ！」

「ははは、監視室にいるさ。」

「奈於くん！どいて！」

すると慎也はドロップキックをぶちかました！

「奈於ちゃんは先に行つてて！」

と、椀沢さんも応戦して、道は開けた。

「あ、わ、わかった！」

2人は苦戦しているようだ。それをよそに、僕は走った。

監視室に入ると、パイプいすの上に紙切れが置いてあった。

『おくの扉、倉庫にて待つ。』

ここは倉庫と直結している。そこからはなにか不穏なオーラが感じられる。

…意を決して、扉を開いた。

スポットライトに照らされ、晃弘と真夏は縛られて、ぐったりしていた。

イエスが貼り付けられ、これから処刑が行われるかのごとく。

「おやおや、まさかあんたから来てくれるなんて。」

聞き覚えのある声…だれだっけ？

「くすくす…くすくす…。」

「誰だ！誰なんだ！」

「忘れたのか、おれたちはおまえらに復讐するんだ。松葉杖の恨み

は晴らせてもらおう！」

「松葉杖……まさかおまえらは僕を拉致した！」

2週間前、真夏をストーカーから救うために、僕はのせられてこいつらに捕まったんだ。

「あ那时的ストーカークラブ部長！」

「ストーカーいうな！まあいい、その口もじきにふさいでやる。」

「なんで2人を捕まえたんだ？」

「分かるだろう？付き合っていたんだよ！だから死刑だ。真夏は生かすが痛い目にあわしてやる！」

「くそ……」

「おっと、今回あの忌々しい会長は来ないぜ。」

「濡のこと？」

「ふふふ、おまえ名義でケーキを贈つといてやった……毒入りの、な。」

毒入りのだつて！？

「これでおまえが毒をいれたことになり、社会的に死んでもらおう。もちろん……」

ばたん！

「身体的にも、痛めつけてやる。」

「…なぜ、おまえらはここまでして真夏にこだわるんだ？」

「…なぜって？…はは、ははは！忌々しいんだよ！幸せそうにしているやつが！

おれたちはなあ！家族いねえし恋人いない！不幸な連中さ！真夏もそんなやつだろう？

仲間にしてやりたかった！けどよお！あんたらのせいで幸せそうになりやがった！

だからみんなまとめて不幸にしてやる！」

「……………」

こいつらは僕らは幸せだと思っている。たしかに僕らは幸せものだ。けれど…その幸せをつかむまでは、本当に苦難の道を歩かないといけない。

どんな状況になっても、逃げずに立ち向かえば、幸せなんじゃないか？

こいつらは逃げている。人を道連れにしようとしている。

「……僕は」

「ん？」

僕は制服の内ポケットから組み立て式の柄を取り出し、取り付けた。そして刃となる木片を先端につけた。

「薙刀だと！？」

「僕は… あんたらを許さねえ！」

この際明かしておこう。僕の父はなぎなた術の達人だった。

1 - 2 1 囚われの七夕（後書き）

まさか奈於ちゃんが薙刀を持っていたとは…
びっくりでしょう。

1 - 2 2 鋭刃の七夕（前書き）

前回のあらすじ

奈於ちゃん薙刀使えたんだ

1 - 2 2 鋭刃の七夕

「僕は天真正伝香取神道流てんしんしょうでんかとりしんどうりゅうにおいて、
きさまらを討つ！」

「な！なにに！なんのことがよく分からない！」

現存最古の武術流儀の天真正伝香取神道流は、別名、神道流、香取神道流とも呼ばれていて、

剣術、居合、柔術、棒術、槍術、薙刀術、手裏剣術に築城、風水、忍術等も伝承されている

まさしく総合武術ともいえる。僕の父さんは剣術、薙刀術、手裏剣術を教えていた。

この世界では名の知れた有名人で、アメリカにも行って、教えてたとか。

小学校のとき姉さんといっしょに教えてもらってた。

よく剣術と薙刀を練習したなあ。手裏剣は…ノーコントロール。

「総員、かかれー！！」

暗闇の中からたくさんの人が現れた、けど…

相手の拳を柄で受け止め、すかさず腹に蹴りをかます。

けれど別の拳が僕のわき腹に浅くヒットし、少し体制が崩れた。

…人数が多い、これはけっこう苦戦しそうだな。

僕は後退し、相手と距離をとった。木片を…刃にとりかえるために。

「ザンテッケン
…斬轍鍵！」

残像を残し、光の速さの如く一瞬にして、相手を斬り倒す。

ただし外傷は与えない…相手のあばら骨を3本断ち切る技だ！

「ぐおお…。」

20人程度かな？慎也の病院はフィーバー状態になるだろう。

「きさま…女子のくせになぜここまで強い…！」

「女子じゃねえし、なぎなた術を習っていた、けど…」

ここまで過ごしてきた、大切な仲間たち、みんなを…

「僕の大切な人たちに手を出したあんたらが許せねえんだ…！」

僕は薙刀をまわしながら、相手に立ち向かった。

「残念だな…」

その瞬間、背中に強い衝撃が走った。薙刀が腕から離れていく…！
鉄パイプをもった男！まだ仲間がいたのか！

「ぐっ…。」

「おれの父はマフィアだからな…銃くらい持つてるんだよ。」

向けられた銃口がきらりと光る。これは死を意味することだろう。

「奈於くん！奈於くん！」

「返事して奈於ちゃん！」

扉の向こうから慎也と椋沢さんの声が聞こえてきた。けれど扉は開かない。

晃弘と真夏は目を覚ました。が、そのとき僕は銃を向けられているところだ。

「風巻！？どうしてここに！？」

「奈於…。」

「おやおや、ちょうどいいところで目を覚ましたか。こいつの死に様を見てから、

あとを追うがいいさ。くくく…」

せめて…ここで遷が来てくれたら、助けくれたら…

「じゃあな、奈於ちゃん。」

もう…万事休すか…

ドーン！！

すざましい轟音がとどろいた。ただし扉から。

「なんだ…！？」

扉はほこりが舞って白く見える。どうやら扉は破壊されたらしい。すると部長がもっていた銃はなにかに弾かれて飛んでいった。

いまだ！僕は跳ね起き、薙刀を手にとって構えをとった。

あれ？壁に突き刺さっているのって…ナイフ？

すると、どこかに聞き覚えがある声が倉庫内に響いた。

「すみません。弟に手を出さないでもらえますか？」

1 - 2 2 鋭刃の七夕（後書き）

そろそろです、あと2日ですべてが終わる…

1 - 2 3 星夜の七夕（前書き）

前回のあらすじ

すごいね、薙刀術。

1 - 2 3 星夜の七夕

ナイフを持って現れた人、それはまさしくあの人だった。

「ね……姉さん……!？」

「奈於ちゃん、怪我はない？」

「く……姉だと……」

「そう。私はこの奈於ちゃんの姉、風巻茜よ。」

異常なほど姉さんがかつこよく見えた。変態のくせに！

「くそ……たかが1人増えた程度で我らは負けん！」

部長は鉄パイプを両手にもち、襲い掛かってきた！

「うおらー！しねええ！」

相手の乱雑な攻撃をいとも簡単によけている。厳しい修行をつけたことのある姉に

とって、たやすいことだろう。

「部長！援護するぜ（殴

「まったく…ボクたちを忘れていないよね？」

晃弘と真夏も縄を切って救出した。あとは決着をつけるのみ。

「この！この！」

「悪あがきは、そこまです。」

次の瞬間、姉はバック転で背後にまわり、ナイフを逆手に持った。

そして…相手の首元を切りつけた。

「はっあ…」

ドサッ

「みねうち…。」

こうして僕らはひとつも外傷を与えずに、敵を全員たおしたのである。

「まさか風巻がほんとうに薙刀を持っていたとはな…。」

「まあ昔はみんな信用してくれなかったからね。」

「それにしても2人ともすごかったですね。」

「いや…それほどでも…」

と、僕たち姉弟の声がはもって、おかしくなっただけで終わった。

「ところで姉さん、どうして僕の場所が分かったの？」

「慎也くんが、教えてくれたの。」

「え？」

「うん。今回は僕たちだけじゃ危ないような気がする。」

「澪ちゃんが風邪をひいてたからお見舞いしに行ってたの。そして拉致事件が…。」

「澪！？そういえば僕名義でケーキが贈られたそうだけど…」

「奈於ちゃん字制と違っていて怪しかったので、今は私たちの家にありますよ。」

「よかった…。ほんとうにありがとう姉さん。」

「そういえば、今日は七夕だったね。」

「ん？姉さんどうしたの？」

すると、姉さんはいくつかの短冊が飾られた、小さい笹をとりだし

た。

「奈於ちゃんのお友達みんなの願い事よ。」

「え！いつのまにこんなもの…」

それはそうと、みんなは何を書いたんだろう？

・いつかあいつにメイド服を着せられますように
海野原慎也

少し寒気がしたのは気のせいであってほしい。

・いろいろなことで慎也くんに勝てますように
栳沢栳

栳沢さんらしい、負けず嫌いな一面が出てる願い事だなあ。

・オレは天才だ…
坂本翔

もはや願い事じゃない。

・今度からしマヨネーズ味のクッキーが焼けますように
沫雪
莢香

よりによってその味に行き着く莢香が恐い。

・わたしの思い、みんなの思いが報われますように。
樹雨 澪

これは…澪か。さすがみんなのことを考えてくれている、でもわたしの思いってなんだろう？

・全国大会へいきますように。

河本真夏

そっだ、大会は近い。晃弘のため、みんなのために全国へいくんだ。

あとは晃弘の短冊は…これか。

・みんなを全国へ行かせてやりたい。行かせてやるんだ。
野晃弘

水

これは願い事じゃない。決意だ。この短冊からは晃弘の執念が宿っているように思えた。

「奈於ちゃんの、願い事は？」

僕の願い…

「僕の願いは、全国へ行くこと、でもそれだけじゃない。」

僕がなによりも望むもの。栄誉よりお金より大切なもの。

「この仲間たちと、この先も分かち合えますように。」

今日の七夕の夜は晴れていて、星がきらきらと輝いていた。

あの星たちは、僕に、みんなに希望をもたらしていつてくれるのだろうか。

人間嫌いの僕に、優しく輝いて、照らしてくれるのだろうか。

…僕らの戦いに、一つの区切りが訪れようとしていた。

1 - 2 3 星夜の七夕（後書き）

さあ、いよいよ第一期最終話！
あした、すべてが終わる。

1 - f i n L A S T S W I M (前書き)

これがとうとう第1期最終話…

1 - f i n L A S T S W I M

7月17日土曜日、とうとうやってきた町内文化体育大会。

「全員集まったな。これから我々は全国への切符を手に入れるために、

精一杯戦い抜く。選手でないものは、一生懸命応援するように。」

いよいよこのときが来たんだ。僕らは、全国へ行くんだ…！

《選手の方は、着替えをしてプールサイドへ集まってください。》

「行ってこい、わたしもすぐ行く。」

『がんばれよー！』

『応援してるからなー！』

『結婚してくださいー！』

声援を背中に受け、僕と勇人、真夏、そして…晃弘は歩き出した。

あの七夕の翌日、金井良助が怪我をしたことを知った。

どうやら登校中、晃弘があいつらに捕らえられていたところを助けたそうだけど、

相手の蹴りで右のふくらはぎをやられて、晃弘もたすけることができなかったそうだ。

お見舞いに行ったときだ。

「すまないな…選手なのに、こんなふがないことになって…」

「晃弘を助けようとしたこと、ほんとに感謝してるよ。」

「おれの代わりに晃弘を出してやってくれ。そう將軍に伝えてくれ。それが今のおれにできる唯一の罪滅ぼしだ。」

こうして、晃弘は正式にメンバーになったのだった。

『えー、これより町内文化体育大会をはじめます。』

今回は、個人種目と団体種目とあるけれど、今日は団体種目が行われる。

400メートルメドレーリレーで、4チームは1ブロック、

全部で3ブロックあって、勝ち上がった3チームが、県大会へと駒を進めることが出来る。

『みなさん、健闘を祈っております。』

いよいよだ…

僕らはCブロックの3番だ。1と4番のチームは余裕なのだが、2番のチームは、

平泳ぎと背泳ぎが異常に早い、勇人と僕が、がんばらないといけないのだ。

「まさか…俺がこの舞台にたてるとはな…。」

「良助の分まで、がんばってよ。」

しばらくして、晃弘はこう言った。

「これで…約束が果たせるかもしれない…けれど。」

「けれど?」

「俺さ。全国へ行くことってそんなに大事なもののかなって考えてた。」

「え?なにをいまさら?」

「俺たちは、全国へ行くために泳いでるんだろ?でもさ、俺たち…」

「なに?」

「泳ぐ本当の目的を忘れているような気がする。」

本当の…目的?

『それでは、Cブロックの予選を開催します。』

とうとう、やってきた。僕は、この日のためにここまでがんばってきた。

恩返しのため、真夏の約束のため、でもどうであろつとみんなの心は

全国出場一つのみに定まっていた。

…僕らなら、絶対にいける！

『それえは選手はスタートの準備をしてください。』

「がんばろつな、みんなのためにも。」

「うん！」

「よいーい」 ドン！

これまでに何回もスタートの音を聞いてきたけど、今回だけは少しびっくりしてしまった。

バタフライでは負けないであろう勇人は、着実に差を引き離しつつある。

スタートが肝心なこの競技では、とてもおいしい。

『がんばれー！』

『離すよー！』

声援があちこち聞こえる中でも僕らのチームの応援はよく響いていた。

ふと観客席の方を見ると、姉さんと晃弘のお母さん、それに澪もいた。

こちらが見ているのを気付くと、手を振ってきたので少し恥ずかしかった。

僕は、力強くうなずいて返した。

独走状態で勇人は帰ってきた。次は真夏…がんばってくれ。

1・4番チームは離れたのだが、2番チームが食いついてくる。

特に背泳ぎ、平泳ぎで加速をかけてくる。

ターンを3回済んだところで、差はもうなくなっていた。

真夏はピッチをあげて…え…？

「ペースが…落ちてる…？」

右腕が、動いていなかった。左腕だけで、推進していた。

「まずい！かなりはなされる！」

真夏が15メートルを泳いだ時点で、2番チームはもう交代していた。

『真夏ちゃん！がんばって！』

『あと少しだよー！』

仲間たちが、必死で応援している。ただ、ゴールへ導くために。

「真夏！あと少し！」

「真夏！あとは任せろ！」

真夏が壁にタッチしたところで、晃弘は飛び込んだ。

たのむぞ…

「ごめんね…私のせいで…」

「いいよ、よくがんばってくれた。はやく医務室に行って診て貰って。」

「うん…ありがとう。」

もうすでに40メートル差がついている。しかも相手は速い。

僕は…ほんとうに全国へいけるのかな…。

『晃弘！あきらめんな！』

『そのペース保ってけ！』

晃弘は、驚きのペースで食いついていた。

選手になって1週間の間、ここまで誰よりも練習に取り組んでいた。

全国をめざすために、自分を助けようとした、良助のために。

そして、真夏との約束をはたすために…

けれども彼はこう言ったのだ。

俺さ。全国へ行くことってそんなに大事なもののかなって考えた。

泳ぐ本当の目的を忘れていたような気がする。

背泳ぎの時点で、あれだけ絶望的な状態になっても、あきらめずに泳いだ真夏、

そして応援しているみんな。

全国へ行くための、目的…じゃない。

「奈於。もうおまえの順番だ。」

「あ、うん。」

差は…前より縮んでいる。晃弘…

「あとは…まかせた！」

「ああ！」

そして、僕は飛び込んだ。みんなの意思を受け継いで。

僕はこれまで、ただただ恩返しをするために泳いできた。

かつての僕を、みんなは変えてくれた。

だから、利香が教えてくれた水泳で、全国へ行けば、みんなは喜んでくれる。

でも、それは恩返しじゃない。罪滅ばしに過ぎなかった。

『さあ、3番チームが2番チームに追いついてきた!』

差は15メートル。相手はもうターンをして、最後の25メートルを泳ぎ始めた。

続いて僕も勢いよくターンして、相手を追う。

『がんばれ奈於ちゃん!』

『もう少し!』

泳ぐこと。それは頂点を目指すこと、みんなとしてのぎを削ることができる競技。

いろいろあるけど、僕は重要なことを忘れていた。

水泳をやるにあたり、いちばん大切なこと。

かつて僕が、しまいこんだ感情。

『さあ、差はもう近い！果たして、どちらが先にゴールするのか！
？』

もう差はない！残り5メートル、僕は、決死の思いで手をのばした
…。

『…勝者、2番チーム!』

こうして、僕たちの水泳は終焉を迎えた。

1 - f i n L A S T S W I M (後書き)

これで終わり… なわけねえだろおえ！

そんなわけないじゃん！

あと1話あるよー

1 - E X I w a n n a b e w i t h y o u .

真夏が転校することを知ったのは、それから1週間たってからのことだった。

最後の別れの挨拶を、駅ですることになった。

企画部全員で、真夏を見送ることになった。

「実家にかえることになりました。なのでみんなとは今日でお別れです。」

私のために尽くしてくれて、ほんとうにありがとうございました。

「

「真夏は…大人になったね。」

「これも奈於。あなたのおかげよ。私をいちばんにはげましてくれたもの。」

「そりゃ、幼馴染だもん、助けずにはいらなくて。」

「くすっ…さすが奈於だね。」

「でも僕も真夏ちゃんの状態が、こんなにもよくなるなんて思わなかった。」

奈於くんはすごいよ。」

「慎也まで…。」

「それにしても…晃弘くんは約束を果たせなかったね。」

「まあな。でも…お別れだなんてな…。」

いちばん辛いのは晃弘だと思う。約束も果たせずに、離れ離れになってしまうのだから。

「晃弘君…。」

電車が来た。もうお別れの時がきてしまった。

「じゃあ、真夏ちゃん元気だね。」

「ボクも応援してるよー。」

「がんばってね真夏ちゃん。」

「オレが応援してれば、いつかは幸せになれるさ。」

「河本先輩、今までありがとうございました！」

「元気でね、真夏。」

「じゃあな…真夏、いつか、どこかで…」

「うん、みんなありがとう…さよなら。」

こうして、真夏は電車に乗り、電車は出発した。

「晃弘…。」

「いいんだ…これで。」

「ねえ奈於ちゃん。今まで黙ってたことがあったの。」

「え？なに？」

「真夏ちゃんの失踪した日、わたし病室で真夏ちゃんに会ったの。」

「え！」

「ごめんね。窓を眺めてたら、やつれた女の子が歩いてて、思わず病室を飛び出して

連れてきたの。それが真夏ちゃんで、いろいろ悩みを聞いてたの。
奈於ちゃんも来るだろうと思って、真夏ちゃんを市営プールに向
かわせたのも

わたしなの。」

そうだったのか…どうりであの懐かしい香りがしてきたんだ。

「そうだったんだ。ありがとう、湊。」

「え？」

「真夏の居場所を教えてくれて。」

「…どう…いたしまして。」

でもあの懐かしい香りって、真夏の匂いだったんだよね…？

そうだ、これ晃弘君に、ほら。」

「ん？会長これは…？」

見たことのあるラズベリーの花絵の封筒…

「真夏ちゃんからの手紙よ。」

ぴりぴりと切り口が開かれていった。内容を見てみると…。

『拝啓 水野晃弘さま。』

この1ヶ月間、あなたとみなさんの協力のおかげで、とても幸せな日々を

過ごすことが出来ました。ほんとうにありがとうございます。

私が君を好きになったのは、自主練のときにストーカー犯に出くわした時、

一生懸命守ってくれたときでした。ほんとうに、かつこよかった！でも私のした約束のせいで、君の心はズタズタに引き裂かれてしまいました。

ほんとうに……ごめんなさい！とても悲しかったです！でも、君は私を愛してくれた。そして、チャンスはめぐってきました。

しかし今度も私のせいで約束を果たせずに、終わってしまいました。私は、君を不幸に陥れることしかできませんでした。

だから私は決めました。君をこれ以上悲しませたくない。

私は、あえて実家に帰ることに決めたのです。』

「真夏！？どうして！俺はぜんぜん楽しかった！不幸なんかじゃなかった！」

『私のことは忘れてしまってもかまいません。

また別の恋をしても、君が幸せならそれでいい。

私は……君の幸せを望むだけ。

けれど、心のどこかがうずいています。

別れたくない……私を忘れて欲しくない……

涙が止まらなかった……でも、勝手なことはもうしない。

いつか、また会いましょう。それから、いっぱいお話ししましょう。もう、迷いません。これからがんばって…さようなら、今までありがとう。

I w a n n a b e w i t h y o u .
より 』 河本真夏

「真夏……くっ…」

『I w a n n a b e w i t h y o u .』 わたしはあなたと一緒にいたい…

「真夏ちゃんは…いい子ね。晃弘くんのために…。」

「…真夏。分かった。俺はがんばる。」

「晃弘…。」

「大丈夫、いつか…また会えるから。」

夕暮れは、僕らに別れの苦しさを教えてくれた。と同時に、これははじまりなんだ。

僕は水泳は泳ぐことを楽しむものなんだということを痛感した。

きつと、どんな水泳選手も、泳ぐことが楽しくて、しょうがないと思う。

真夏は、その楽しさを取り戻したかったんだ。

もう夏休みだ。中学校最後の…

3月に、僕らは卒業する。別々の道を、歩くことになる。

遠いようで、あっという間なんだろうな。

だけど僕は願う、この夕日に向かって。

I
w
a
n
n
a
b
e
w
i
t
h
m
y
b
e
s
t
f
r
i
e
n
d
.

G
E
O
F
S
W
I
M
f
i
n

S
T
A

1 - E X I w a n n a b e w i t h y o u . (後書き)

「わたしはあなたと一緒にいたい。
素敵な意味です。」

さて、これから第2期が始まります。

テスト近いので、更新きついですけどね。
これからもよろしく願います。

2 - S t S T A G E O F S I N G

僕は人との別れの辛さを知った。

人を恐怖の象徴としてきた僕は、勘違いと成り行きによって1人の少女に出会った。

その人は、僕に対しておどけた口調で、無邪気な笑顔を見せてくれたり、

優しい口調で、僕を救ってくれたりしてくれた。

あの1学期、晃弘は約束を果たせず、最愛の人と別れていつてしまった。

僕には、人をこんなに愛することがよく分からない。

でも今は…

「おーい！奈於！はやく行くぞ！」

「奈於ちゃん！」

「あ、うん。夕飯なに作って欲しい？」

「そうだな…夏野菜カレーでも。なす入りで。」

「やー！それはだめ！」

高校生になり、新たな友達と過ごしている。

今思い返せば、彼女は僕に様々なものを残してくれた。

でもそれも遠い思い出…

あの2学期のころからだったのかもしれない。

人を、好きになることを知ったのは。

「ねえ、奈於ちゃん。」

「ん？なに遷？」

「企画部みんなに伝えて。帰りに会議室に集合するわ。」

2・St STAGE OF SING(後書き)

やってまいりましたSTAGE OF第2期！
これからもよろしくね！

2 - 1 企画会議（前書き）

「どうもお久しぶりだね。 桜だよ。」

「風巻奈於です。 いよいよ第2期が始まったね。」

「そうそう。 でもさくたんはまたなにか変なこと
思いついたみたいだよ。」

「僕嫌な予感しかない…」

「あ、そういえばたくみんさんの作品とこの小説が
本格コラボする予定だった。」

「向こうもしてくれるみたいだった。」

「あちらは、奈於ちゃんとボクを絶対に使っらしいんだ。」

「そうなんだ。 でもなんで… あれ!？」

「…あ。」

過去のトラウマ、よみがえったり。

2 - 1 企画会議

「えーと…出席とろつか。」

2学期が始まって3日目の今日、企画部の集会が行われた。

ちなみに後々聞いたけど、この部は部長であり前期生徒会長の樹雨
澪が

なにか世界を変えるんだ！という理由から発足したらしい。（慎也
談）

「まず海野原 慎也くん。」

「はい。」

海野原 慎也は幼馴染の男前だ。生まれ変わるのならこんな人にな
りたい。

「つぎに水野 晃弘くん。」

「はい。」

水野 晃弘も幼馴染の1人。バカだけど写真と絵が異常に上手い。

「栳沢 栳ちゃん。」

「はいはい。」

ボクっ子の椋沢　椋さんは慎也とライバル関係を築いていたりする。

「坂本　翔くんに沫雪　莢香ちゃん。」

「オレはここさ…。」

「はい。」

パソコン部兼企画部の2人。坂本　翔は根っからのナルシストで、なにかあるたびに

「オレ天才」とつぶやいているバカだ。

沫雪　莢香は唯一の2年生で、いろいろ頼りになるいい子だ。

「最後に、風巻　奈於ちゃん。」

「くん呼びしてください!」

僕、風巻　奈於は、6月の文化祭のとき、漫才のネタごときで漫に告白してしまった、

れっきとした男子だ。

「今日、みんなに集まってもらったのは、企画部の今後の行方についてよ。」

「今後の…行方?」

「一応、わたしたち企画部は非公認団体として発足したわね。けれど真夏ちゃんの一件で、

とくに大きな活躍をできなかったため、公認はしばらく見送ることになったわ。」

「質問です。公認団体になると、いいことがあるんですか？」

「莢香ちゃんいい質問ね。公認団体になると、“活動資金”が得られるの。」

あと顧問の先生もつくので、常識の範囲内で大きな活動をするこ
とができるわ。」

「それじゃあ、公認になるためにはどうしたらいいのかな？」

「それが今日の話題よ。10月の23日に、なにが行われるか知ってる？」

「たしか、光鳴湾中学校30周年誕生際…だった。」

「そのとおり。そしてわたし、夏の生徒会での会議に、こんな企画を提案したの。」

名づけて…『非公認団体催し人気決定戦！』」

「うわぁ、すごそうです！」

「興味はあるな。」

「どういうことをやるのかな？」

「えへん。この学校にはたくさんの方公認団体があることはみんな知ってるかしら？」

「俺は写真クラブも掛け持ちしているが、非公認はたしか25はあった気がする。」

「その我々を含めた非公認団体全クラブで催しものをして、一般生徒のアンケートで最も人気の高かったクラブは、晴れて公認団体へと昇進できるものだわ！」

「つまりは…それで1位を狙うのか。」
なるほど…でもあれ？ 濁ってたしか…

「濁ってたしか、光鳴湾中学校前期生徒会会長兼公式活動団体審議委員会生徒代表だったよね？」

「奈於ちゃん…よく覚えたね…。」

なぜか覚えてたんだよな…なんでだろう？

「濁の力なら、ここ公認にできたんじゃないの？」

「わたしだけが審査していないから、却下されちゃったの。」

「それで、催し物はなににするの？」

「それを今から決めましょう。みんななにがいいかしら？」

いろいろ討議の結果、ここまで絞りこんだ。

『ミズノ写真館』

『落葉喫茶モミジ』

『翔のまんきつ』

「なんだか系統が似てるわね…。」

「俺が言つのもなんだが、写真館は間違いなくかぶるから却下だ。」

「漫喫はいいかもしれないな…。」

「でもさ、入客人数が限られてくるから票を集めにくいんじゃないかな？」

「とすると喫茶店…もかぶるかも。」

「ん?…そうだ。」

「慎也?どうしたの?」

「晃弘くん、きみの写真の売り上げが高い人ランキングは？」

「え？ああ、3位が栂沢で2位が会長。1位が風巻だ。」

「僕1位なんだ…。」

「この美少女3人がここにいて…ということはこのことを最大限に生かす方法は…。」

「まった。僕は男だよ？」

ついに慎也にまで女としてみなされたよ。

「ちなみにこの中で料理が出来る人は？」

「『はーい』」

手を挙げたのは栂沢さんと莢香、そして澪だ。一応僕も手を挙げとく。

「莢香ちゃんも厨房決定だね。澪ちゃんは生徒会長だからウェイターしかできないね…。」

「あうう。そうだった。」

「僕は厨房に入ることになるだろうし、栂ちゃんはどうかな？」

「ボクは別になんでもいいよ？」

「男子から人気のある漣ちゃんと奈於ちゃん。女子から人気のある椀ちゃんがいるから、

生徒からの信仰は厚いと思う。でもそれを最大限に生かすには…

なにかウェイターには衣装を着てもらうか…。」

「それってまさかコスプレか？」

「単刀直入に言えばそうなるよ。翔くんさすが。」

「やっぱりオレ様天才だあ…。」

「ちょっと狂人化してるよ翔。んで誰が着るの？」

「そうだね…そこはこちらパソコン部2人が、いろいろ計算して決めてもらうか。」

「任せろ…この天才にな。」

「がんばりますよ。」

「ま、奈於ちゃんは着る羽目になると思うよ。」

「…はい？」

なんだかんだで、企画部は『衣装喫茶モミジ』の大きな基盤が完成した。

…絶対にウェイターはいやだ。

2 - 1 企画会議（後書き）

というわけでコラボ…できたらいいなあ

2・2 企画会議風巻家にて（前書き）

「二週間ぶりだよねこれ…。」

「そうそう、さくたんが『体育大会がようやく終わったし、3連休くるから今日から1週間くらい更新強化週間にする!』っていったよ。ボクは楽しみにしてるよ。」

「というわけです。よろしくおねがいします。」

「奈於ちゃんのおんなことやこんなことがついに…」

「いやな予感しかないなあ…。」

2 - 2 企画会議風巻家にて

「姉さん、僕にグラタンの“作り方”を教えてください。」

ウェイターを避けるためには…厨房に立つしかない！そうしてなんとかレパートリーを

増やそうとした結果、こう行き着いた。

「なんで、グラタンなの…？」

結論を述べよう、秋っぱいから。

「とにかくにも、作り方を教えてください。」

「いいけど…なんで唐突にそんなことを？」

コスプレを避けるためといったら、全力で敵にまわるだろう。

「そろそろ手羽唐だけじゃ社会人として死ぬだろうから。」

「…そうですか。あのね、奈於ちゃん。」

「ん？」

「私、とってもうれしいです。」

「へ？」

「奈於ちゃん自身から、こう姉さんに頼みことができるようになって、

お友達とも楽しそうだし、なによりも毎日笑っていて、
もう強くなっただな、って…こんなに幸せなことはないです。」

その言葉は澄んでいて、とてもあたたかく包みこんでくれた。

氷のように硬かったかつての僕は、今はデリケートな水だけでも、
そのあたたかさを感じることができている。

「それじゃあ、材料を用意して、作ってみましょうね。」

「うん！」

今はこの生活が、大好きだ。

「え？メニューを決めさせてくれ？」

翌日慎也に、メニューの決定権を明け渡すように頼んだ。

「少し候補はあるんだけど…。」

「どんなの？みして。」

（候補）

- ・冷やし中華
- ・ゴーヤチャンプルー
- ・もつ鍋

「…季節に全く合っていない気がするよ。」

「…奈於くん、逆転の発想って知ってる？」

「知ってる。この場合、全く成功しないよ。」

「…一回召集を試みよう。」

「慎也の逆転の発想を、少し採用してみたんだ。」

その夜、緊急企画部集会はわが家で行われることになった。

そして昨日姉さんと開発したグラタンをみんなに振る舞った。

「“つくしのグラタン” あえて春の食材をつかった、冬の訪れを予感させる料理。」

なかなか斬新だな。」

「みんな、いっぱい食べていつてね。」

「“いただきまーす!”」

昨日何回も焦がしたこの一品は、受け入れてもらえるかな…

「わあ！不思議です！春の訪れを予感させるような、あたたかい味です！」

「これはすごい…。天才のオレが言っただから間違いない。」

「おいしいわ！これは絶対にメニューに入れるべきよ！」

「奈於ちゃんすごかったですよ。ちょっと作り方を教えると、一人でがんばって何度も何度も焼いていました。」

「姉さん、恥ずかしいからそういうこと言わないで…」

「でも奈於ちゃんほんとに料理が上手だね。ボクも負けたくないなあ。」

「あ、そういえばボクもメニューの提案があるんだ。作ってもいいかな？」

「栞沢さん考えてきたんだ。」

「けっこう自信作だよ。」

目をぎらぎらさせながらこちらを向いているのは気のせいだろうか。

「ところで湊ちゃんは料理したりする？」

「せざるをえないって感じね。一人暮らしだし。」

「えー湊って一人暮らししてたの！」

「うん。両親はもういなくて、実家のおばあちゃんがいろいろおくってくれるの。」

大根とかしょうゆとかお米とかね。」

そうだったんだ。そういえばかつて僕も一人暮らししていたな。

いろいろ大変で、姉さんが来てからけっこう楽になったけど、

澪は大変なんだろうな。

「うー、しょうゆのいいかほりがします〜。」

「もうすぐできるよー。」

椀沢さんの料理は、いったいどんなものなんだろう…。

2 - 2 企画会議風巻家にて（後書き）

先にいっておきますが、椀さんの料理は
殺人兵器ではありません。いたってまじめです。
というわけで明日から数日間がんばって更新しつづけます

2 - 3 企画部会議提案

「はい、できたよー。」

「おお、これはなんだ？」

「ナスにひき肉をはさんでみたんだ。おしょうゆにつけて食べていてね。」

「ではいただきます。」

秋茄子だから、少し焼いてあるな…どれどれ。

「あーこれおいしい！」

「なすがパリっでしていて、中のひき肉がジューシーであっていいす！」

「これはまた…奈於ちゃんに負けてないわ。」

「栞沢さんすごいね、これはグラタンよりおいしいよ。」

「あはは、でも奈於ちゃんもすごいじゃん。」

「他の料理はだめなんだよね…。」

「じゃあ、この2品はメニューに決めましょう。」

それじゃあ厨房は奈於ちゃんに椀ちゃんに頼んでみようかしら。」

「でもあの2人は人気だから…できれば衣装をきさせたいんだけど。」

「じゃあこうしようか。問答無用で全員着ると。」

…はい？

「翔くん…きみはなんて画期的なことを…。」

「まあ天才だからな。」

慎也…どうして君はうれしそうなんだい？

「それでいい？みんな？」

「賛成です！」

「ちょっと楽しみだ。」

「ボクもいいよ。」

「…オレは着るのか？」

…うわあ。分かるかな？反論できないこの空気。

「奈於ちゃんの衣装、楽しみですね。私も行きましょう。」

「任せてください茜さん！全力で着させます！とっても似合うもの

を！」

とりあえず今わかったことは、ものすごい勢いで恥をかく運命にあることだ。

みんなが帰ったあと、姉さんは出発の準備にあたっていた。

「アマチュア世界大会…カナダでやるんだよね？」

「ええ。出れるなら出ところって。」

日本で有名になった姉は、世界でも注目されつつあった。

「じゃあ、行ってくるわね。」

「うん、がんばってね。」

そういえば…姉さんとまだご飯を食べに行っていないな…。

少し胸を躍らせている自分がいた。

2 - 3 企画部会議提案（後書き）

今日は短めで、明日はがんばります！

2 - 4 フラッシュバック（前書き）

前回のあらすじ

前書き入れるの忘れた…

2 - 4 フラッシュバック

『チャンピオンは！日本代表風巻 茜！！（字幕）』

これはそのあとの物語であつた…。

『おめでとう！すごいね茜さん！』

「漣…茜さんに連絡入れればいいのに…」

『番号が分からないから、とりあえず奈於ちゃんにおめでとうを伝えようと思って。』

「姉さんに伝えておくよ、帰るのは3日後になるそうだけど。」

『よろしくね。』

ピッ

気が利くなあ、漑は…

P r r r r !

『もしもし奈於ちゃん?』

「姉さん、おめでとう!見てたよー。」

『ありがとう、まさかこんなことになってしまっなんて、びっくりしちゃった。』

「漑も、おめでとうってさっき電話をくれたんだ。」

『あは、優しいのね。』

「そうだね。それじゃあ、ごちそうして待ってるね。」

『それじゃあね、今から飛行機に乗ることになったから、明日には帰れそう。』

「そうなんだ。じゃあおやすみなさい。」

「おやすみ、奈於ちゃん。」

ピッ

予定より早く帰ってくるのか…まあ、よかったかな、ついこの前までいやがっていたのに。

姉さんも、常識を持ってくれたようだし（卑猥なことは作者が書かないからだ）

それじゃあ…明日はきつとなんていわれてしまうのか…

朝は小鳥のさえずりで目を覚ます、ありきたりな模様…のはずだったけれど、

今日はなぜか外の騒がしさで目が覚めた。

「うう…なんかうるさいな…」

リビングへ行ってテレビをつけてみると…

『こちら、先日世界大会で優勝した風巻 茜さんの自宅です。現在ここに妹さんがいるとのですが…。』

なんてこった。

『出てきたところでお話を聞こうかと…。』

外を見てみると、100人はいるであろう報道陣が家の周りを囲っていた。

『あの茜さんは美人なので、妹さんも美人の可能性もありますよね。』

『ある新聞記者が姿を見たそうなのですが、こちらもまた美少女だったそうですよ。』

…裏口から出るか。

けれどご丁寧に裏口まで人がいました。最悪です。

『さあ、妹さんは現れるのでしょうか…。』

…もう行くか。

ギイ…

『おっと！出てまいりました！今回お姉さんが優勝しましたが、心境のほどを！』

『お姉さんとは仲はいいですか！？』

『羨ましい気持ちとがありますか？』

『おめでとうのメッセージを！』

『お友達にもこの件を伝えましたか！』

『心境のほどを！』

僕は戸惑ったのではなかった。おびえていたのだ。

質問を次から次へと浴びせ、必死な顔をしている記者。

フラッシュを何発もたき、こちらも姿をとらえようと必死なカメラマン。

彼らはまるで…僕を独占しようとし、欲に駆られ、人ではない怪物のようであった。

怖い

怖い

いやだいやだいやだ

僕をそんな目でみるな…！

激情に支配され、あの感覚がよみがえった。

あの顔…！あの声…！

『どうせ私が苦しんでいるの、分からないよね。』

分からない！分からない！人の苦しみなんて！

彼らは僕の苦しみを分かっちゃいない！僕は利香の気持ちが分からなかった！

そのことに驚愕し、怯え、その場に座り込んだ。

『どうしました！？』

「来ないでくれ！もう帰って！姉さんに会わせて！僕はあんたらが嫌いだ！

もう僕にかまうな！消えろ！消えてくれ！」

叫び、のどは枯れ果てた。もう止められない！僕の心は……空っぽだ。

「うわあああああああ！！」

2 - 4 フラッシュバック（後書き）

まじめな話の時には前回のあらすじが前書きに書かれます。
それ以外？てきとーですよ？

2・5 引退します、歌います（前書き）

前回のあらすじ

この先どうしようか迷走していた。

2 - 5 引退します、歌います

「奈於…ちゃん…」

わたしはあの時の絶望を味わった。

ニユースで、奈於ちゃんの様子を知った。とても苦しそうだった。

2年前、あの子は大切な人を目の前で失ったのだ。

こんなことになったのは、わたしの…せいだ…

愚かにも病み上がりの奈於ちゃんをおいとして、歌っていたのが間違いだっただけ…。

「奈於ちゃん…ごめん、ほんとにごめん…」

ぼろぼろと涙を流した。

そして…覚悟を決めた。

もう歌わない。ずっと奈於ちゃんのそばにいて、と。

『美声の歌姫、突然の引退表明』

悲しかった。ただただ悲しかった。

自分のせいで、姉さんは歌を辞めざるをえなくなったのだから。

どうして…僕は姉さんに歌ってほしかった。

それが僕と姉さんの喜びの一つだったのだから。

ただ、僕が取り乱したせいで、姉さんを苦しませることとなってしまった。

帰ってくるのは明日…。

なんて迎えたらいいか、分からなかった。

「風巻…だいじょうぶか？」

「うん、大丈夫。ちょっと取り乱しちゃったからさ。」

「奈於ちゃん、元気？」

「奈於くん、昨日は大変だったね。」

こうみんな励ましてくれと、自然に気力が戻ってくる。少しだけ
だけど、

悩みもどうでもよくなったりする。

「さあ、席につけよう。今日は合唱コンの曲決めを行うからな。」

…合唱？

2 - 5 引退します、歌います（後書き）

テストもあつたし、これからもあるので
更新はきついです。

2 - 6 歌は私の魂（前書き）

「なんだか久しぶりだね、奈於ちゃん。」

「そうだね桜沢さん。2ヶ月ぶりじゃないかな。」

「うーん、ボクらにとってもいいよ“受験”なんだよね。」
「勉強してないなあ。」

「だから勉強もあるから、更新は奇跡なんだって今回。」

「まあよくがんばったよね。」

2 - 6 歌は私の魂

「というわけで、候補はこの2つでいいな？」

・名づけられた葉

・Song Is My Soul

「では多数決をとる。好きなほうに手を挙げろ！」

今自分の心境にふさわしいのは『Song Is My Soul』
のような気がする。

また姉さんに歌ってもらえるのは、この曲しかない。

多数決の結果、慎也を除いたほぼ全員、『Song Is My
Soul』を挙げた。

なぜだか慎也は驚愕の表情を浮かべていた。

慎也の表情が気にかかったが、それよりも姉さんはもう帰っているのか気になった。

「…帰ってたらなんて言おうか。」

歌ということに敏感であろう姉さん、きっと合唱コンの話をしたら
気まづくなるだろうし。

「…でも言わないとなあ。」

ずっと黙っていてもいつかはばれるし、それはそれで姉さんを傷つけかねない。

どうやら家に明かりがついていたので、姉さんはもう帰宅しているようだ。

………

ガチャ

「ただいま…。」

「あ、おかえり」

うん、想像以上に元気だった。

「あ、姉さん…歌やめるって…。」

「あんまり目立ってもね、だから今度で最後にするわ。」

「今度…?」

「10月23日の学園祭がラストステージ、ということで、メデイアには秘密なの。」

奈於ちゃんの合唱コンも楽しみね。」

この姉…心配して損した。

「奈於ちゃんは何歌うの?」

「『Song Is My Soul』っていう曲。たしか姉さんも歌ったよね?」

「懐かしいわ…『歌は私の魂』ってかっこいいじゃない?」

「うん、そうだね…。」

姉さんの魂である『歌』を奪ったことに、また胸が締め付けられる。
姉さんは小学校の頃から、歌が好きだったそう。

中学、高校は独学で勉強をし、専門学校へ推薦入学したほど、努力家だった。

自分は奪ったのだ。奪ったんだ。奪ったんだ…。

次の日、慎也は学校に来なかった。

2 - 6 歌は私の魂（後書き）

この曲、中1のときに歌いました。
今回この作品にマッチしていたので、
使用させていただきます

2・7 あの歌は危険だ（前書き）

前回のあらすじ

暇さえないが、あつたら更新することに。

2 - 7 あの子は危険だ

「慎也くん、あの歌は呪われているって思い込んでいるんだ。」

栞沢さんから異変について聞いた。

中学1年のころ、慎也のクラスであの歌を歌うことになった。

彼は指揮者をやって、クラスのみんなをまとめていった。

僕は見ていなかったけど、本番も大成功を収めていたように見えた、

けれど実は、裏に大きな事件があった。

それは本番前日のこと、どうやらクラスで揉め事があったらしい。

そして誰かが…中心人物である男子を、床にたたきつけたらしい。

これによってその子は怪我をし、ショックから転校していったそう
だ。

慎也は指揮を振りつつ、役目を無事終えた。

けれど…異変はその後に起こった。

あんなに仲のよかったクラスが、荒れ始めたのだ。

落書き、いじめ当たり前。乱闘なんかしょっちゅうで、

不登校も多くなった。

みんなはこれを呪いと思い、恐怖に支配され、クラスは壊滅寸前に
ま で な っ た。

けれど慎也と、違うクラスだった栳沢さんが協力して、なんとか立
ち直ったという…。

「そのころの慎也くん、正気がなかったよ。ボクもなんだか悲しく
な っ て き ち っ っ て、

いっしょに協力しよう、って手を差し伸べたなあ。」

「…そうだったんだ。」

「今回ボクも、どうしようか迷ったけど、やっぱり同じ失敗を繰り返
返したくない、

と思っ た し、みんながいるからチャレンジしてもいいんじゃない
かな っ て

手を挙げたんだ。もう一つのほうに手を挙げた子は、かつてのク
ラスだったね。」

不安はあるけど、栳沢さんがいれば大丈夫なんかじゃないかという

期待もある。慎也も恐れる必要はないと思うけど…。

i p o dで何度も聴いて、歌っていたところ

P r

姉さんは買い物だし、僕しか出る人はいない。

「はい、風巻ですけど…」

「…うな。」

「はい？」

「歌うな。わたしが呪ってやるぞ。」

ガチャン！

「はぁ…はぁ…」

なんだ今の…

呪いって…一体…

2 - 7 **あの歌は危険だ（後書き）**

ちよつとふざけようかと思っていたら、
けっこう真面目になっちゃいそう。

218 ほったらかし(前書き)

「久しぶりよ！わたしが出てきたの！」

「零…うれしそうだね。」

「だってしばらく出番なくて！奈於ちゃんもううれしいよねー？」

「まあ…」

218 ほったらかし

「…そんな内容だった。」

「…え？」

翌日、椋沢さんに昨晚の電話について打ち明けた。以前起こった事件から、心当たりのある人を

彼女は知ってるかもしれないからだけど…

「女性の声ねえ…考えられるのはそのクラスだった子だと思うけど、ボクは分からないなあ。」

残念、収穫はない。今日も慎也は来なかったし、不安は募っていくばかりだ。

空は無駄に青くて、雲ひとつ無い快晴。あんなふうに不安、恐怖、全部晴れ渡ってしまえば

どんなに幸せなのだろうか。陽の下で咲く花のように、揚々とできないだろうか。

1日は、それでも進んでいった。

…そして、企画部の召集が入った。

漣は相変わらずだらだらしていて、なんだかパソコン部の二人が意気揚々としていた。

菫香のにこにこは可愛いけど、翔のうすら笑いが恐い。

「ねーねー、慎也くんどうしたの？」

漣…そんなタイムリーなこと訊かないで。

「あー、分からないけど調子悪いらしいんだ。」

栳沢さんのフォローに感謝です。あ、なんか菫香がしゃべるっばい。

「えー、今日はみなさまにお知らせがあります！なんと…」

喫茶店で着る衣装が決まりましたー！！」

あ…ほったらかしてた。感謝祭企画。

「おおー、写真ネタが増えるぜ。」

「どんな衣装なのかなあ、楽しみだよ。」

「早く見せて！」

「慌てるな。1人ずつ発表してくぞ。まずは慎也とこのオレ様だが、この執事服でいくとしよう。」

けっこう漫画でありがちなタイプ。カッターシャツにスーツ、そしてリボンと

慎也にお似合いなタイプ。ある種、翔は薔薇を加えさせたら似合うと思う。

「続いて桜先輩は、橙の紅葉をイメージした衣装です！」

「きゃー！かわいいわね！桜ちゃんいいなー。」

黄色の生地の上にオレンジの布と、ギザギザのすそで

紅葉をイメージしたスカート。カッターシャツの上にオレンジのベスト、蝶ネクタイと

かわいいデザインになってる。似合いそうだね。

「あ、莢香ちゃんの衣装はどうなったの？」

「それはですね、風巻先輩といっしょなんです！」

と出されたのは…エプロンドレスの黄緑色版に、一般的なホワイト
ブリムを頭に添えて。

世間では、それを“メイド服”という。

「きゃーーーーー！！ぜっったい2人とも似合うわ！もう最高
」！

「これは写真出したら売れるわな。」

「楽しみだなあ。2人の晴れ姿。」

あはは…僕のXデーは近いのかな…

＊

「いいよね澪は。衣装着なくて。」

「わたしだってかわいいの着てみたかったもん！生徒会長もいろいろ大変なの。」

帰り道、いつもの澪との会話。桜木の道を並んで歩いて、

今日もいつものどおりの風景と想ってた。

けれど、本屋の前の交差点で、ぱったりであつた人にはたいそう驚いた。

「え……慎也？」

「…あーあ、見つかった。」

218 ほったらかし（後書き）

ギャグに走ったらまたまじめー

2・9 隠ぺい(前書き)

前回のあらすじ

いやあ、知人にとつたり会つなんてそうそうないぜ

2 - 9 隠ぺい

結局僕らは、近くの喫茶店で談をとることにした。

僕はカプチーノ、漑はブラックコーヒーを頼み、慎也に訊いてみた。

「2年前…僕がいないときになにがあったんだ？」

「わたしがここに来るまでに、なにがあったの…？」

…慎也は押し黙っていた。むろんぼくも追及はしない。

ウェ이터が置いたカップからのコーヒーの苦い香りが鼻をくすぐった。

同時に胸のなかでなにかがくすぐるような…言葉では表せられない不安が募る。

それは慎也がなにも言わないから…そうなるのかも。

「…なあ、慎也。なんとか言っつて」

「わかった…ちなみに言っておくが、これは学園全体の黒歴史だ。しかも…」

隠ぺいされた事実そのものだ。」

「学園が…隠した事実？」

「ばれたら、ここの存続は危うい。」

「…ほんとに、なにがおこったの？」

慎也から語られた事件は、僕が柊沢さんから聞いたものよりも、想像を絶していた。

＊

1年3組、そのクラスはもう存在していない。

合唱コンクール、生徒たちは「Song Is My Soul」を懸命に練習した。

その声は美しくて、もう優勝は余裕かと思っていた。

けど…そのときに“ヤツ”は来たんだ。

名前は山川^{やまかわげんじ}絃磁。一見はふつうの生徒だ。

けれど…彼は大富豪の坊ちゃんで、クラスのことなんてどうでもいいと考えてた。

たんだ。

それから1発、頬を殴って、こういったんだ。

「…おまえみたいなエリートは死ねばいい。」

そうやって、その子は教室を出て行った。

そんな偽善ぶった情けない子…名前は海野原 慎也だ。

*

「大問題だったよ…中学校はなんとか山川に泣き付いて、事実の隠ぺいのために

大量の慰謝料払って…けれどやつらは僕らのクラスに圧力かけまくって…

結局僕と椀ちゃんがなんとかしたけど…傷は癒えなかった。」

「…慎也くんは、どうしてその子を殴ったの？」

「…そのまんまだ。あんなやつ許せなかったからだ。」

それはわかる、わかるんだけども…

「けれど僕が恐れているのは、歌じゃないんだよ。」

歌じゃない…？

「どういう意味？」

「帰ってきたんだよ。山川のやつらが。」

…帰ってきた？この地域にか？

「あいつら海外から帰ってきて、再び絃磁がここに登校することになった。」

「それって…」

「あいつらは学園を恨んでいる。おそらく嫌がらせに走るだろう。それがどんなに…下賤だとしても。」

鳥肌が立った。1つのクラスを崩壊に追い込んだ絃磁…

そいつがまた、帰ってくる…？

「まさか…慎也…」

「まちがいなく、僕がいるクラス……つまり奈於、君のいるクラスに
やつはやつてくる。」

2 - 9 隠ぺい（後書き）

…どうなるんだこれ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9488m/>

STAGE OF

2011年10月7日01時43分発行